



388
46

了

伊藤
銀見著

338-46



伊藤銀月



予

其一 予の懷舊

伊藤銀月

明治四十三年三月二十一日の午前三時時分である、青森發上野行直通奥羽線廻りの汽車は、今方に那須野を走つて居る、自分は今福島あたりから結び掛けた切れぐの夢を破つて、端無く、己れ自身が何の爲めに旅行しつゝあるかに想ひ到つた。

一週間前、羽後の能代に居る妹の訃音に驚かされて、取る物も取り取へず、雪なほ深き秋田へ赴いたのであつた、葬式は自分の

到着を待つて直ぐに行はれた、妹は、生後十日の子を世に残して、
初産の惱みの爲めに生命を奪られたのである、最も斷腸に禁へな
かつたのは、翌くる朝の骨拾ひであつた、北手の山の雪なほ深き
を踏み分けて、母、妹、次、母と妹夫婦とが借りて居た家
の主人なる赤塚氏母子などと共に、火葬場に至り見れば、屋根破
れて、低く覆へる灰色の雪空は我等を覗くが如く、冷たき雪の
雫は暖き灰に滴つて居る、手ん手に長い箸を取つて、氣味悪く蒸
氣を立てる灰を掻き分け、生々しき骨の缺片を拾ひ出すに、中に
は、前に焼かれた他人の骨の残りと思はしく、白く黄ばんで比較的
軽いのがある、人間もモウかうなつて仕舞ふと滅茶々々である、
母が箸を投じて、「モウいゝ加減で止さう」と云つたのは、世に悲
慘の極の語であつた、容こそ美しとは云ひ得され、胸襟の洒然た

ることは、三人の同胞の中第一で、殆んど世の婦人の倫を絶した
妹、人死して佛となるべきものならば、妹は誰よりも佛になり易
い者でなければならぬ。
杖とも柱とも頼む娘に先立たれ、而も、生後十日の孫兒をこれ
から見行かねばならぬ母は、何たる不幸の人間であらう、自分
及び弟とはちがひ、妹は全く母の手一つで運命と闘ひつゝ育て上
げられたものであるから、随つて母を思ふこと深く、母も亦主と
して妹を頼りにして居たのであつた、かやうな次第であるから、
自分の希望から云へば、先づ當分は能代に居て、母を慰め妹を弔
ひつゝ日を送りたいのであつたが、東京に於ける自分の都合は之
を許さない、斯くて、今後屢々秋田へ行つて見るべき事に定めて、
母をも慰め、又自ら慰め、昨日の流車で東京へ戻る旅途に上つた

のが、今方に那須野を通過して居るのである。

肉親の者の死は、人をして痛切に己れの過去を思はしむるものである。自分が汽車の中で結んだ切れくの夢も、妹及び母と關聯しての事を主として、すべて自分の歴史の部類であつた、中には、十數年來殆んど忘れ果てた事もあつた。

汽車の窓から外面を隙かし見ると、まだ朝の色が那須野に動かない、蕭疎たる木立を通して、何所からか沈鬱な鶏鳴が聞こえて来る、實に、人をして萬感を胸に満たしむるの光景である。

聯想はそれからそれへと移つて、一昨年の秋の初、此那須野に避んだことを想ひ出す、那須野から那須温泉に至り、那須温泉から那須嶽の噴火口を訪うたことを想ひ出す、那須嶽で十數年前の舊知己に奇遇したことを想ひ出す、其舊知己は臺灣で知り合つた

者なので、臺灣に於ての自分の奇絶且つ危絶なる經歷を想ひ出す、それから延いて、自分を載せた汽車の前途に當る宇都宮で土方の仲間と零落したことを想ひ出す、土方をして居る中に誘ふ者があつて、足尾銅山へ坑夫となりに行つたことを想ひ出す、足尾を去つて後、此汽車が先刻越して来た板谷峠の雪中に倒れ、一旦死んで、不思議に救はれたことを想ひ出す。

さうして、改めてそれ等の事を眞面目に書いて見やうとの念が起つた、今迄も、其概略を書いたことがある、其一端を小説の中に加へたこともある、けれども、特にそれだけを細かく有の儘に書いたことは無いので、いつか試みやうと思ひながら、また其機會を得ず、義理のある借金でも返さないやうに、始終氣になつて居たのであるが、此時、痛切に之を試みるの興味に動かされた、

事る其必要を感じた。

そこで、家に歸つてから早速之に筆を執らうとしたが、他の文債が少くないので、直ぐに實行するが出来ない、書樓の上から望む新坂の櫻の梢の真白になるに及んで、やうく着手の機会を得たのである、いでや、日清戦争局を結んだ翌くる年の臺北に於ける自分の事から書き始めて、那須嶽噴火口の下で故人に逢つた事に其局を結ばう。

其二 決死

時は明治の二十九年である。

十一月の下旬なので、暑さが長かつた臺灣も、北部はやゝ秋を催して來た。

夕方臺北で汽車を降り、北門を指して徒歩で行く銀月の扮装はどうであらう、二十五の若盛りで、活氣と希望とは四肢五體に漲つて居るが、柳原で買った白つばいセルの夏洋服に、汚れた茶の中折帽子の底を下し、小さい柳行李を黒めりんすの兵子帯で十文字に括り着けて片手に提げ、他の一方の手には毛織子の蝙蝠傘の屑屋も閉口しさうなやつを杖にして居る上に、カラーもカフスも無く、お負けに、足を包むは兵士の古靴、大道店で五十錢かに買った物だから、其見すばらしいこと、舶來の乞食然として居るのである。

單に外觀ばかりでなく、見た通りが此時の自分の全體なのである、東京を出る時にやうく旅費だけを調達し得たのであるから、汽車に乗つて、汽船に乗つて、又汽車に乗つて、飲んだり、食つた

り、煙草の煙にしたりした残り、此に至つて纔に今晚の宿錢ぐらゐしか残らないのである、けれども、自分は決して當ても無く臺灣へ空手で来たのではない、自分の先生で且つ親分たる荒尾精と云ふ傑い人が、有馬組の顧問として臺北に来て居るから、それを便りに遣つて来たので、手紙で願つて承諾を得た上なのである。荒尾先生は、遠からず支那へ赴かれるのであるから、その時一緒に連れて行つて貰はうと云ふのが、自分の態々遣つて来た趣意で、臺灣は唯だこれ待つ間の滞在所に充てるだけなのである。大蛇が蟠るやうな臺北城の城壁を抜いて、巍然として峙つ樓門の屋根に尖り、淡水河を壓する大稻程の數百家に並んで、臺灣特有の兇悪なる相を呈して華々と繁り茂る竹林、瘦せて角立つた城外の亂山の内地と異なる黒すんだ紫色、基隆の方面から吹いて来る

餘のある風に、天を蔽うて起つ純黄色の塵埃、それに籠められる往來の群の、内地人と支那風の土人と半々に打雜る異様の光景、飲食物を鬻ぐ臺灣人の種々の露店、すべて一種悲涼なる黄昏の景色を成すを、物珍らしく眺めながら、北門に向つて徐に歩いて行く。

「やア、君」と後から聲を掛けて、突と押並ぶ者がある。見れば、恐ろしく背の高い男で、矢張り自分と好一對の舶來乞食然たる打份をし、鼻の下だけ剃り落して、頬から願に掛け紐を取つたやうに半圓を描いて居る縮れ髯が、異様に目に立つのである、これは、神戸以來の船の中で、同じ下等室の轉び合ひに心易くなつた人間であるが、まだ名も素性も知らない。「やア」と此方も應じて

「君は幾度も臺灣へ御出でなすつたさうだから、精しく御案内だらう、西門街と云ふ所へはどう行つたらいいのでせう」と訊ねる。

「西門街の何と云ふ家へ行くんです」

「有馬組出張所に居る人を探ねるんです」

「む、有馬組出張所か、それなら直ぐ判る、まア、僕と一緒に來給へ」

雨除けの外套を細く疊んで肩に掛け、犬殺棒のやうなステッキと泥塗れのズック製大靴とを一掴みに片手に提げて、片手はぶらぶら打掉りつゝ、長い脚を大跨に開いて、風を切つて前進する勢ひに、自分も劣らじと足を早めた。

「君、有馬組出張所の誰を探ねるのかえ、臺灣で些でも要領を得て居る人間は皆己が知つて居るぞと云ふ鼻息である。」

「荒尾精と云ふ人さ」

「荒尾と云やア、休職陸軍大尉で、有名の豪傑だらう」

「む、さうだ」

「其人が有馬組出張所に居るのかえ」と不審の體。

「社員になつてゐるんぢやアない、御客様にして會社が優待してゐるんだ」

「ふむ、君は其人と如何云ふ關係があるのかえ」

「僕の先生でもあり、親分でもありだ、僕は、遠からず荒尾先生と一緒に支那へ行くんだ」

「さうか、僕も支那へ行く爲に、臺北へ金を取りに來たんだ」

話し合ふ中に北門を潜つて、何時しか二人は城内に入つた、すると、其大漢子は俄に直と立停つて、城門に近く町の右側を占め

た支那風の家の、今灯を入れたばかりの掛行燈を指し

「僕は此所へ泊る、暫く居るんだから、明日でも尋ねて來給へ、君は此通筋を真直に行つて、最初の横町を左へ曲り、突當つたら又右へ曲れば、府前街と云つて、之と並行した通筋がある、そこで有馬組の出張所と聞けば直ぐ判かる、それから、僕の苗字はあかしつて云ふ、赤い石と書くんだ」と早言に云ふ。

指した掛行燈には、輕便旅宿と書いてあるのである。

「有難う、ぢやア明日遊びに来るよ、僕は伊藤つて云ふ」

赤石と名乗つた男と別れて、夕暮の臺北の町を足早に行き、教へられた通り突當つて左へ曲ると、果して、立派な一構への、以前にあつた支那風の家を壊して別に建てたらしい和洋折衷造に有馬組出張所と鮮かに讀まれる軒燈を掲げてある。

去年の秋、京都東山若王子のほとりの山莊に尋ねてから、絶えて久しい先生の音容に接しられることと思へば、そゝろに胸が波立つのである。

夜だから窓口に人が居ない、傍らの通用門を潜つて入ると玄關らしい口がある。

「頼まう、頼みます、般くと眞暗な空屋に響き渡る自分の聲、物凄いはかりである。

聲に應じて、遙の奥に燈火が動いたので、聽て人が出て來るところであらうと、慎んで控へたが、それツきり何の物音も無い。

荒尾先生が、細い目に疎らな髯の裕りした赤ら顔、肥え太つて腹が膨れた象のやうな身體、太く低い聲で緩々と親切に物を云ふ重々しさ頼もしさ、暫くはそれを思ひ浮べて恍然として居たが、

人の出て来る氣配がしないので、又一聲。

「御頼み申します」と張り上げた。

眞黒な建物がむいんと唸り渡る。

「ばた」と、不意に近い所から足音が起つて、眞黒な所に眞黒な人が現はれ、暫くは風吹鳥のやうな自分の風體を隙かし見る様子であつたが、急に燐寸を摺つて、手に持った物に點けると、ぱつと周圍が明るくなつた、見れば、和服を着流した四十餘りの男で、西洋蠟燭を立てた金屬の燭臺を捧げて居るのである。

眉を擡めて、やゝ暫くの間、自分の帽子の上から靴の先迄を見上げ見下した末に

「何です」と、低く、鋭く冷かな一句を漏らす。

頼む所ある自分はそれにも辟易せず、衣囊を搜つて用意の名刺

を取出し、先づ無言でそれを差延べた。

男は溢々手を出して受取り、一層眉を擡めて、名刺の面を瞥と目を走したが

「何の御用です」と、今度は蒼蠅さうに聲を尖らす。

「別に用を云はなくつてもいゝから、それを荒尾先生へ取次いで下さい、寧ろ件を眼の中に置かすに、自分は何處迄も取濟まして見せるのである。

「えッ、荒尾先生、荒尾様を尋ねて御出でになつたんですか」と、男は俄に色を變へる。

「え、東京から態々遣つて來たんです」と、自分は急に大きくなる。

「東京から」と肝を潰したやうに云ふと共に、名刺は男の手を離

れて、ひらくと自分の足許に落ちた。

おのれ無禮な奴、既に荒尾先生を尋ねて東京から来た者と判つた以上、敬意を表して取次ぐのが當然であるのに、此方の名刺を土足で踏む地面へ落して、それでまだぼんやりして居るとは、言語道断、馬鹿か、腑抜か、狂人か、次第に依つたら、蹴倒して目を覺まさしてやらうと、拳を握つて屹と睨む。

「お、御氣の毒ですが」と、男は聲を震はして云ひ掛ける。

「何ッ」と自分はどうも勘忍囊を破つて大喝一聲に及んだが

「荒尾様は、昨夜鼠疫で御亡りになりました」と震へ聲を挫られるに至つて

「えッ」頭の上に雷が落ちたかとはかりに、手足を張つて身を低くした。

暫くは、身が剛張り咽喉が塞がつて、動くことも聲を出すことも出来なかつたが、單に案外と云つたぐらゐでは追附かない案外さ加減に、自分は自分の耳を疑はなければならなくなつた、寧ろ相手の言語を疑はなければならなくなつた。

「何と被仰つたか、もう一遍聞かして下さいませんか」

「荒尾様は、昨夜鼠疫で御隠れになつたんです」

御隠れになつたとは、無上の敬語と似寄つた發音で、不相應な用ひ所であるが、面喰つた男は確かに其唇から斯く漏らしたのである。

「鼠疫?」

「え」

「鼠疫ですか」

「他の事とはちがひます、誰が冗談に云ふもんですか」

「ちやア、御葬式は何時です」

「明日午前十時、北門外の本願寺別院で致します」

此所迄確めると、もう人をも我をも疑ふべき餘地は無い、堪ら

なくなつて来て、會釋もせず其儘街上へ飛び出した。

餘りの事に涙も出ず、珍しい臺灣の町の珍らしさも目に入らず、

東西南北の差別無く、無茶苦茶に城内を歩き廻つた、驚きと悲み

とに心が搔亂されて、身體に火が附いた者が疑然として居られぬ

やうに、唯だ意味も無く狂ひ歩くのである。

これが、荒尾先生に逢つた上で、前途の事の計畫が進み、愈々

これから何か始めやうとか、支那へ渡らうとかの場合に臨んでか

ら、俄に先生が急病で亡くなると云ふのなら、話に小説的結構が

含まれて面白いけれども、呆氣無いたつて、これが事實だから仕

様が無いのである。

狂ひ歩く中に、少し氣が鎮まつたと思ふと、不意に涙がはらは

らと迸る、それと同時に、先生と頼み親分と慕ふ所の人が、病と

云ふ病の中から選りも選つた厭な病に罹つて、暗殺されたやうに

俄に亡くなつたことを、哀み悼むの念が、骨を揺がして湧いて來

るのである、泣いては歩き、歩いては泣く、夜ではあるが、往來

の人が此状態に疑ひを起さない筈はない、けれども、自分の心に

は往來の人が目に入る餘裕も無いのである。

大きな門を潜らうとして、ふと氣が付き、何だか見覚えのある

やうな門であると思つて、よく見直すと、見覚えがある筈、城内

に入る時潜つて來た門、即ち臺北府の北門なのである。

「お、北門」

思はず獨語を漏らしたが、振向くと丁度目に入るは、かの輕便旅宿の掛行燈である、すると兎に角に自分は今生きて居る身であると云ふことに氣が附いた、生きて居る以上は、飯も食はなければならぬ、さうだ、それが差當つての急問題であると思ふと、始めて夢が覺めたやうになつた。

夢が覺めたやうになつて見ると、身體が草臥れ果て、綿よりも柔かくなつて居るし、腹はぐうぐう鳴り響いて飢を訴へる、手に提げた行李も足を包む靴も、急に重たくなつて来る、もう一足も動かれなくなつた。

けれども、懐に残るは一夜の宿錢にも足らぬ端下金である、こ

れでどうなるものか、此上は、故郷の秋田へ電報を打つて急を訴へ、金を送らせるより外に、法も術も無いのであるが、それにしても落着場所が無ければならないし、數日間待つて居なければならぬ、臺灣は「人を見たら泥棒と思へ」の極端な戒を尋常に守る所と聞いて居る、こんな風をして突然宿屋へ飛込んだら、金の來る迄黙つて置いて呉れることは扱置き、前錢でなければ一晩も泊めないと刎附けられるに極つて居る、どうも困つたものである。

かう思ひ煩つて立淀む自分の目を、輕便旅宿の掛行燈が頻りに引くのである、む、赤石と名乗つた男が此所に泊つて居る、云はと途中の知合で、互に氣心を知つて居る譯ではないから、どう云ふか判らないけれども、兎に角、あの男に事情を打明けて、相

談相手になつて貰ふのが、今の身には唯一つの活路であると、首肯いた、それア當り前から云へば有馬組出張所へ泣附くのが順であるけれども、自分と荒尾先生とは、單に、一度逢つて意氣相投じた仲で、知合つてからまだ日久しくならないのであるから、荒尾先生の仲間で自分と先生との仲の事を知つて居る者が無い、そこで、怒じ名乗り出て、困つた餘りにいゝ加減の作り事をして死人を利用しやうとする者と見られるのは業腹であると云ふのが、其時の自分が有馬組出張所を眼中に置かない理由である。

荒尾先生の名も赤石は知つて居たし、其中には此方の紹介で先生と近附になりたいやうな様子も見えた、それに、自分と同じく支那に志を懐いて居るらしいから、話し込んだら、滿更見殺しにしようとは云ふまい、さうだと、決然引返して、支那風の古い建

物の雜作だけ多少日本流に直した戸口を、掛行燈と摺れくゝに潜つた。

「御免なさい、當家に赤石さんが泊つて居られますか」

「赤石徹さんなら泊つて居られるだが、何ぞ御用かな」

天井の無いがらんだりの建物に、鴨居から下だけの座敷が、舞臺の上の世話場宜しくに並んで、七分三分の境を細い土間が裏手迄通り、其三分の方は宿の者の住居と覺しく、前に帳場があつて、こんな宿屋には不似合なカイゼル鬚の立派な男が、一樂づくめのけばくしく光り輝く打份の上に、金鎖、金齒、金の指輪の色を添へて、傲然と控へて居る、それが御役人然と構へて、自分を眼下に見下し、ごつ、ごつ、した九州辯を土臺の合の子言語で、斯う問ひ返すのである。

「伊藤と云ふ者ですから、さう傳へて下さい」と云ひ乍ら、自分
は潤れて其男の顔を瞻る。

見れば見る程立派な男である、何たる堂々たる風采であらう、
白く光澤ある長い顔、廣く圓みのある額、高く筋の通つた鼻、や
ゝ凹み加減の炯々たる眼、朱を塗つたやうな色できりゝと締つた
唇、濃く長い眉、それに、自慢らしくびんと刎ねたカイゼル鬚は、
本家本元よりも却つて立派なくらゐである、けばくしい俗悪な
服装も、此人に於ては寧ろ威嚴を添へるやうに見えるから豪儀な
のである。

古く煤けた、屋根の高い天井の無い支那風の家を、雑作だけ新
しく日本流にした不調和さ加減よりも、此男と此家との不調和さ
加減は更に甚しい。

「おい赤石君、一寸出て来て呉れんか君を尋ねて来た人がある」
と、土間を隔てた客室の方に向つて大音聲を擧げられるに至つて
自分は全く肝を潰した。

「おう、今行く」と、奥の方で答へるは擬ひも無く赤石と名乗つ
た男の聲である。

もう臥床に就いたのを、態々起きて来る様子である。

御役所に出頭した人民のやうに、殊勝に帳場の前に立つて、赤
石の出て来るのを待つて居る中に、又一人入つて来た者がある、
腹掛半纏に白の半股引と云ふ打份で、顔は日に焼け、身體は塵埃
に塗れ、鼠色の毛布で捲いた風呂敷包を小脇に抱へ、自分に劣ら
ぬ飢え瘦れた有様である。

「一晚御厄介になります」

「宿泊料三十銭、外に食料を買ひます」

「宜しう御座んす、明朝勘定します」

「可けません、前金ぢや」

「明朝でもいゝでせう」

「可けん」

「……………」

「可けん、出て行け」

「なに」

「出て行かんと掴み出すぞ」

カイゼル鬚の端が蛇のやうに揺いたと見ると、さしも立派な風采の男が、粹悪近づくべからざる人相に變じ、天井も壁もびりびり鳴り渡る程の恐ろしい聲で、噛み着くやうに嗚鳴るのである。

「雙ぢやアないよ」と面膨らしたが、其實痛く辟易の様子で、すごとく力無く出て行く。

「はゝゝゝ御客さん驚いたか、氣が弱うては、臺灣で商賣が出来んのぢや」とありつたけの金齒を残らず晒して、氣持好さゝうに笑ふ。

其時丁度、奥座敷の障子を開けて姿を現はした者は赤石である。「やア、君か」、例の一風變つた面に無頓着の笑を浮べ、寝巻の袍裾をつんつるてんに着なして、有合ふ下駄を突掛け、土間の細道をのつさゝと立出でる。

「赤石君、大變な事が出来た」

異様に曇つた聲が、震へを帯んで送つた。

「なに、どんな事が」と立停まる赤石の驚きに連れて、カイゼル

鬚も目を圓くする。

カイゼル鬚が今の男を追ひ拂つた見厥の中にも、臺灣の真相は同はれるのである、愈々「人を見たら泥棒と思へ」主義を極度に實行して居る土地にちがひない。

かうなると、自分も最後の覺悟を定めて、底をはたいた勇氣を出さなければならぬのである。

「荒尾先生が昨夜鼠疫で亡くなられた」と、語尾は震えながら、取亂さずに確と云ひ切つたが、自分乍ら、其音調の如何にも沈痛に、臺北の秋の夜の空氣に徹るを覺えた。

「鼠疫、荒尾先生が」、此に至つて赤石も其赤黒い面皮に電のやうな氣を走らせることを抑へ得なかつた。

「荒尾先生ちふは、精の事かえ」、カイゼル鬚も、帳場机を越して

上半身を乗出す。

「む、荒尾精氏の事さ、此人は荒尾の弟子で、内地から先生を便つて來たんだ、僕と同じ船で、赤石が代つて説明して呉れる。

「これア驚いた、あの有名な荒尾精と云ふ人が鼠疫にやられたのかえ」カイゼル鬚は、一旦乗出した身體を更に後へ反りかへらせる。

「實に、こんな案外な事はありやアしない」と、自分は何も蚊も投げ出したやうに云ふ。

「それで、君はどうするんだ」と、赤石は屹と自分の顔を睨める。自分も此所ぞと一心に赤石を睨め返して

「どうもかうも仕様がな」と、祈るやうに視線を燃やす。

「だつて、どうすると云ふ當てが無くつちやア、困るぢやアない

か、荒尾先生が亡くなつたら、誰か有馬組の中の然るべき人に話込んで、どうかして貰ふといふぢやアないか」

「さうは行かない、有馬組には外に僕を知つてゐる者が無いんだから、今更荒尾先生の弟子だなんて申出たつて、食詰者が死んだ人間を利用して来たぐらゐにし加思はれないに極つてゐる、これが臺灣流の解釋なんだ、だから、態々馬鹿を見るにも及ぶまいと思つて、黙つて引下つた次第さ」

「ぢやア、内地へ云つて遣つて、それにちがひないことを證據立てる材料を取寄しちやアどうだ」

「む、内地へ云つて遣つて返事を取る迄の餘裕があるくらゐなら、何も、荒尾先生の縁故に使つて、あの會社の厄介になることばかり考へなくつてもいゝんだ、金が要ると思へば金を送らせる

ことも出来るし、仕事の口を求めゝる有力な紹介を得やうと思へば、それも譯が無い、けれども、寶の山を前に控へても、其山の下の小川を飛び越す足がない爲に、僕は今指を啣へて餓死しなければならぬ運命に迫つたよ、旅費だけあればいゝで来たんだから、囊中贏すところ纒にこれだけさ、御足の無い達摩ぢやア、臺灣に來て犬猫より價値が無い、今追ッ拂はれた奴の例に依つても判るぢやアないか」

度胸を据ゑて沈着き拂ひ、自ら嘲り人を嘲る苦笑ひ諸共、財布の底を掘んで倒さに振へば、帳場机の上にはばらくと散つたは、銀貨銅貨取混ぜての總計七十三錢五厘。

さしものカイゼル鬚も、呆氣に取られて言句が無い。

「宜しい、此方へ來給へ」と、赤石は自分を願で招いた。

「いゝだらう君、僕が引受けるから」とは、カイゼル鬚に向つての
棄臺詞である。

「おい赤石君、確と君が引受けるかえ」、カイゼル鬚は尖り聲を出
して後から睨む。

「大丈夫、何なら前金にして置かうか」、赤石もやゝ冷笑ふやうな
調子になつた。

「いや、君は信用すべき人ぢやから、それにも及ぶまい」、まるで
慈悲に人を泊らせてでもするやうな見脈である。

赤石の情けに、自分は吻と始めて生返つた心になる、明日の事
は明日にして、先づ今夜の食物と寢床とを得たことを、喜ばなけ
ればならぬ。

其三 死中に活を得

「おい、もう起きないか、朝飯の済まないのは、君と僕だけ
だせ」

赤石に揺り起されて、息抜穴の開いて居る煎餅蒲團を刎退け、
不斷着兼寢巻の古布子から手足の長く突出た姿で飛起きた。

「やアもう九時か、これア大變だ、十時には荒尾先生の葬式に行
かなければならない、昨夜は頭腦が亂れて睡られなかつたもんだ
から、今朝になつてからぐつすり寢込んで仕舞つた」

狼狽しながら、赤石の指圖に随つて、手拭ぶら下げ齒磨楊枝を
啣へ、裏手へ出て見ると、城壁の内側が、近く鮮かなあたりから
遠く打鷲む邊迄見え渡つて、其上に聳る山の色と形とは、今の身

にも面白く眺められる、けれども、そんな悠長な事を云つて居られる場合ではないから、空地の草深い所を十足ばかり行つて、井戸端に打棄放しにしてあるトタンの金盥を据ゑ直し、急いで水を汲んでぞんざいに顔を洗ひ、驅足で取返すと、赤石は早や食堂へ入つて待つて居るのである。

「失敬々々、やア、昨夜の雪駄の皮見たいな牛肉の煮込にも恐入つたが、今朝は更に御難だね、雨水宜しくの汁に、豆腐の振殻然たる物が、ふはり〜土左衛門宜しくに浮きつ沈みつして居る、南京米まぢりの臭い飯にこれだけの副食物でいくら取るんだえ」

「おい〜、贅澤を云ふな、今の身の上を考へろ」

「だつて、あのカイゼル鬚がいやに威張つてよ、何方が御客さんだか判らないのが、癪に障るぢやアないか、彼奴が輕便旅宿の主

人かえ」

「さうさ、あれで却々面白い男だよ」

「何だか知らないけど、大きな面をしやアがつて、蟲の好かない野郎だ、輕便旅宿なんて、名前ばかり體裁がいよけど、これア木賃宿に毛の生えたんだ、臺灣の木賃宿だ、金びかて人を嚇かしたつて、誰が木賃宿の亭主を恐がるもんか、これから彼奴を輕便主人と呼び下してやらう」

「もつと小さい聲で云へ、聞こえると憤るせ」

「憤つたつて、何が畏いんだ、生意氣な事を吐すと此方が憤つてやらア」

一寢入して棄鉢の勇氣を振ひ起した自分が今朝の勢ひは、昨夜とまるつきり人が變つたやうである、食堂と云つても、例の帳場

机と細い土間を隔てた障子圍ひの一室の真中に、腐つたやうな食
臺を抛り出してあるだけで、こゝで物云ふ聲は、小さくとも皆帳
場へ聞こえるのである。

食ひ了つて赤石の部屋へ引上ると、自分は急いで古布子を夏洋
服に着換へ、兵隊靴を突掛けるより早く、北門外の本願寺別院へ
驅けて行つた。

よくない病で死んだ人のであるから、葬式は唯だ白木の位牌を
飾つたゞけである、文武の高官の燦然たる禮装、フロックコート
に黒紋附仙臺平の日本紳士、金襴だか緞子だか何だか知らぬが矢
鱈に光り輝く装ひをした臺灣紳士、隅から隅迄安く踏める代物は
見えない中に、たつた一個飛び込んだ自分は、いくら臺灣でも北
部は矢張寒い十一月に、白剥げた鼠の夏洋服と云ふ打份、而も柳

原物の行丈合はない背廣と来て居るから、其目立つて見すばらし
いこと、そゝつかしい奴なら、乞食が葬式を當込むで貰ひに來た
のと思ふかも知れない程である。

「誰殿です、御姓名を御記し下さい」
帳面を控へて居るフロックの男が、迂論と思つたか其方から聲を
掛けた。

「承知しました」
早速筆を執つて、法には叶はないかも知らぬが、天馬空を行く
自慢の手蹟、「荒尾先生の知己を辱うせし羽後秋田の産伊藤銀二」
と、飛ぶよりも早く認め了つた。

これで受附の方は濟んだが、式場に充ち満てる光り輝く人々は、
何れも警戒するやうにじろく、睨んで、自分の通る所、自然と人

波が左右に開くのである、仕様がなから、銀月は自分から退け物になつて、繪かれた龍の彩の半は剝落ちた壁際に寄り、一際見すばらしくしよんぼりと佇んだ。

「此心を知る者は、たゞ荒尾先生の位牌ばかりであらう」と、冷たい壁に向つて獨語した。

聽て讀經が始まる。

石と土とで造つた支那風の家屋をそれに充てた本願寺別院は、晝もなほ夕のやうに薄暗く、蠟燭の燐煌々と搖いで、香の煙濛々と立籠め、極めて陰鬱凄凉の光景であるが、屋外は輝き渡る晴天で、針より白い日光の隙間から差込むのに、人の身體も突き貫かれさうである。

それに、讀經の半ばから俄に烈しい風が吹起つて、屋外に立て

ゝある弔旗の羽ばたく音、其裂け破れる響、豹の叫ぶ聲かと怪まれて身に浸むのである。

讀經が了ると、弔文を讀む者が續々靈前に進む、中にも、青年の支那人が、激越悲壯の調で、背上の辮髪を蛇の如くに躍らしつゝ、眞に哀悼に堪へないやうに述べ去つたのには、銀月少からす感動した。

鬚美しく風采の温乎たる紳士が進み出で

「もう、弔辭を御述べになる仁は御座いませぬですか」と場内を見渡す。

「御座います、私に唯一言述べさして下さい」と、聲を振り擲つた者は自分である。

退け物にされて壁際に佇んで居た乞食然たる青年をそれと見る

や、満場唯だ陸然として、俄に水を打つたやうに静まり却つた。

「はア、貴下が」

「さうです」

「宜しい、前へ御出で下さい」

「自分の進み出る所、人波は前より廣く開くのである、爛熳たる百花の林から一片の枯葉が振り出されたやうに飄々として前へ出た自分は、程好き所に立停まつて、屹と頭を擧げた、白木の位牌に蠟燭の灯影がちらついで、我に向つて動き出すかと思はれる。

恭しく一拜して、再び頭を擧げると、五體に筋金が入つたやうに凍となつた。

「先生、伊藤銀二です、先生のやうな前途に大望を抱へた偉人が、何故そんな詰らない病に勝つことが出来なかつたのでせう、先生

これが私の弔辭です」

涙は思か、血までも雜る絶叫は、静まり却つた場内に響き渡つて、壁をも天井をも打震はした、此に至つて、金光燦然たる文武の高官も無く、金襴緞子の服に珠玉を鑲めた靴の臺灣紳士も無く、燕尾服も無く、フロックコートも無く、満場盡く香の煙の底に埋れて朦朧たる一色を呈する中に、乞食然たる夏洋服の青年のみ、獨り火の玉の如くに輝くのであると、悲絶痛絶の中にも自分は一種の極めて變調なる快感を覺えた。

涙を揮つて退き、又も以前の壁際に佇むと、かの温乎たる風采の紳士が、徐に自分の傍へ倚つて來た。

「貴下は内地から近頃御出でなすつたんですか」
「さうです」

「荒尾先生を使つて御出でになつたんですか」

「さうです」

「何方に宿を取つて御出でます」

「北門際の輕便旅宿と云ふ所に居ます」

「失禮ですが、差當り御困りなさることはありませんか」

之を聞くと、自分は何となくと癪に障つた、此方を荒尾先生の門下の者と信じて、亡人に對する好意を移し、相當の禮遇を以て、身の上の相談對手とならうと云ふのなら、譯が判つて居るが、若し困るなら糊口の道を開いて遣つてもいゝとの態度では、少しも忝ないとは思はれないと、天性の意地ッ張りをこゝに發揮して

「先生が御亡りなすつたんで力を落しましたけれども、自分の身の上には別に困る事はありません」と勿附けた。

「さうですか」と、紳士は案外の顔になつたが、忽ち又左あらぬ體に返つて。

「私は有馬組の〇〇と申す者です、何か御用があつたら御尋ねなすつて下さい」と穩かに述べる。

「有難う」

これで、〇〇と名乗つた人は自分の傍を離れた。

荒尾先生を弔ふ外に用はないと、焼香を済ますや自分は匆々に式場を立出でた。

宿へ戻ると、十一時半頃である。

「御歸りなさい」

カイゼル鬚が、不思議にも機嫌よく迎へるのである、尋常から云へば、此方から「たゞ今」と口を切つても、挨拶するかしらないか

判らない程に氣位の高い奴が、莞爾々々顔で斯うやつたのであるから、自分も思はず目を圓くしたに無理はなからう。

「葬式はもう済みましたか」

自分が黙つて帳場の前を素通りするのに、カイゼル鬚は無禮を咎めぬのみか、なほ追掛けて機嫌を取るのである。

「済みました」と素ッ氣無く云ひ裏て、裏口に近い自分の部屋は赤石の部屋に向つたが、どうも合點が行かないので、我知らず小首を拵りながら障子を開ける。

「やア歸つたか、何を考へてるんだ」と、部屋の中から赤石に聲を掛けられて、始めて自分の素振に氣が附く。

「は、不思議な事があるんだよ」

「不思議な事？」

「さうさ、あの輕便主人が、何だつて急に僕を好遇するんだらう、

不思議な事ぢやアないか」

「愛想好く君を迎へたのか」

「じつ」

「さうか」と、赤石は意味ありげな笑顔を見せる。

「朝飯の時に、態と聞こえるやうに罵倒してやつたから、奴さんそれを聞いて辟易したのぢやアないか知らん」

「は、其觀察は淺薄なるを免れず、あれがそんな事に辟易する男かえ、それには別の仔細があるんだよ、妙な所に文章語を使ふ男である。

別の仔細と聞いて、自分は見當が附かなくなつた、見當が附かなくなると共に、其仔細を聞きたい熱心が燃立つて來る。

「何の仔細だ、焦らさずに聞かして呉れ」

「まだ焦らしもしないのに、可笑しいぢやアないか、まア、靴を脱いで上がれ」

「そうら、そろく焦らし始めた、前置は要らないから、要領だけを云つて呉れ」と、手荒く靴を脱ぎ飛ばして、後退りに蹠り上がる。

「此所の主人が、君と僕とを何所かへ連れてつて、御馳走しやうつて云ふんだ」

「益々判らないぢやアないか、君は餘程輕便主人と心易い様子だから、御馳走される趣意もあらうが、素寒貧の、辛うじて御情けに越つて泊めて貰つた僕に、飲ましたり食はしたりして、どうしやうつて云ふのか」

「そこだ、そこに仔細があるんだよ、けれども、此屋根の下では、屈を放つても隅から隅迄匂ひ渡るんだから、或點以上の話は出来やアしない、そこで、何所か静な所へ行つて緩り面白い相談に及ぼうと云ふんだ、君も男ぢやアないか、豈夫生膽を呉れろつて云はれるんでもあるまい、御馳走するつて云ふ者があつたら、淡泊に承知するがいよ」と、赤石は聲を潜める。

「む、そんなら御馳走になつてもいいが、今荒尾先生の葬式へ行つて来たばかりで、直ぐ自分の樂みに赴くのは、ちと輕薄ぢやアあるまいか」

「形式に拘泥するな、葬式の歸りに吉原へ繰込むことさへ認められて居る世の中ぢやアないか、況して、君の將來の爲にもなる相談なんだ、荒尾先生にして若し靈あらば、喜ばれることはあつて

も決して憤られる氣遣ひがないよ』

『さうか、そんなら行かう』

『まア待て、主人から案内がある筈だから』

これだけで、赤石と自分とは話を止め、主人側の動子を窺つて居ると、暫くたつて

『御免下さい』と云ふ媚めかしい忍び聲と共に、障子の開いた所へ非常に綺麗な首が突き出された。

淺黒い細面で、領足の馬鹿に美しくしい、凄い程仇つばい、それ若の果にちがひない三十前後の女房である。

『一足御先へ參つて、途中で御待ち申しますから、直ぐ御出でなすつて下さい』と、呷くやうに云つたかと思へば、忽ち又消え失せる。

『今のは何だえ』、自分は肝を潰して訊ねる。

『主人の女房さ』

『大した代物ぢやアないか』

輕便主人の此家に不似合な堂々たる相貌にも驚いたが、更に一段此女房の仇姿に驚かされたのである。

不相變の夏洋服に兵隊靴で、赤石に連れられて自分は立出でた赤石の扮装も決して立派とは云へないが、時候相當の服裝なだけに、先づ自分よりは一枚上に踏むことが出来るのである。

北門を後に見て、反對の方向に城内に行くこと半町許、すると町の左側に、往來の人々が何れも振向いて見て行く物があるので、何であらうと目を注げば、何でも無くつてそれは輕便主人である、人待顔に路傍に佇んで居るのであるが、其立派さ加減、全く人目

を引だけの價值がある、さうでなくつてさへ、目に立つ面構へで
あるのに、其鬚をカイゼルにし、其齒と指と帯の或部分に捲附た
物とを黄金にし、お負けに其着物と羽織とを揃の一樂の鯨の腹の
やうに光るのにして居るのである、それが普通より高い身長で、
爲すことも無く路傍に立つて居るのであるから、際立つて輝いて
見えるのも當然ではないか。

但し、輕便主人の立派さは、何方かと云へばやゝこけ嚇かしの
部類に近く、多少演劇の大盜、それも敵役の臭味を帯んで居るを
免れないのが遺憾である。

「やア輕便主人、こゝに待つて居て呉れたのか」
顔を見るより早く、自分は周圍に構はぬ大聲を出した、輕便主
人と呼んでやらうと思つたが、幸ひにこゝに、其好機を得たので

ある。

輕便主人路傍から搖ぎ出して直と二人に押並び乍ら、自慢のカ
イゼル鬚を指先に拈つて、澁く苦く云ふに云はれぬ妙味ある笑顔
になり

「おい、輕便主人ちふのを止めて呉れんか、誰が嗜き好んであんな
眞似をしとるもんか、失敗の揚句、一時世を忍ぶ方便にやつと
るものと見えさうなもんぢやけど、さう見えんちふなら、僕は君
の目の價值を疑はにやアならんぞ」と、無造作に退つて退ける。

「む、輕便主人唯だの鼠ぢやアないな」と、自分は罪も無く興
を催す。

「此野郎、まだ輕便主人ちふか」

「そんなら、カイゼル君と呼ばうか」

「仕様の無い小僧ぢやな、僕の名を呼ばんか、僕は莊田八五郎假名ぢう者ぢや」

「ぢやア莊田君」

「むゝさうぢや」

打解けた顔になつて莞爾々々する、年齢は四十ばかりだらうが、自分と友達交際になつて満足する所を見れば、案外に氣の若い面白く男とも思はれる。

「莊田君、伊藤君は君に昨夜冷遇されたことを、非常に憤慨してゐるんだ、君を宿屋の亭主らしくないつて、憎んでるよ、」赤石は又赤石の一流で、平氣に何も蚊も素ッ破抜いて仕舞ふ。

馬鹿め、臺灣で下等の宿屋をしとるぢやないか、隣から隣迄、障子越しに寝轉んどる奴共は、みんな泥棒の上前取ちふ面をしと

る手餘し者ぢや、其奴共を人間扱ひにして商賣が出来るか、一人に甘くすると一同がえゝ氣になるから、それで君にも態と辛く當つたのぢや、判つたか」

「むゝ、成程、あんな詰らない商賣をするにも、矢張掛引が要るんだね、」自分はせゝら笑ひ。

「判らんな、詰らん商賣ぢやから、餘計に掛引が要るぢやないか、」莊田は横に睨む。

「おいゝゝ、喧嘩をしながら歩かれちやア困るよ、莊田君、此所へ入るんだらう」

赤石が聲のする方を打見れば、「會席御料理筑紫樓」と書いた看板の下に立つて居るのである。

「これア洒落てる、輕便御料理と書いて無いのが有難い」

「又此奴が」と莊田は打つ眞似をしたが、泳へ兼てか、とうく
吹き出して仕舞つた。

北門街二丁目の筑紫樓、普請も設備もすつかり大阪流で、臺灣
にしては、氣の利いた割烹店である。

鉢種の菊を観る物にしての、名ばかりの庭を控へた六疊、閑靜
とは云へないが、此家ではこれよりしんみりとした座敷が無いさ
うで、不承無精に此所に障取る。

床には、臺灣の道具店によく掛つて居る山水の軸物、踏み倒す
と八十錢ぐらゐに負ける黒々と墨を捺つたやつを掛け、貧乏臭い
瀬戸物の壽老人を置いてある、紙門はまだ新しいけれども、これ
も眞黒々の四君子——矢張り臺灣の繪師が描いたのを貼つてある
ので、書は極めて拙劣であるが、ちよつと見ると却々濫いもんで

ある。

「まあ少し喫つてからの談話にしやう」

と、輕便主人は願で女中へ差圖し、上座に据えた夏洋服の豪傑へ
銚子の口を向けさせる。

「む」と盃を舉げて、少しも譲らず、傲然と受ける當時の我輩
は、佐々木照山君より前に、蒙古全體の大王たらんとする抱負で、
眼中に人無き青年であつたのである。

いづれ客の出やうに依つては、轉びもしやうし鯨鯨立ちしや
うと云ふ臺灣流を表はした目附の女中、初から臆面無しにべちや
くちや下らぬ御饒舌をして居たのであるが、光り輝やくカイゼル
鬚を一の容と思ひの外、風吹鳥のやうな見すばらしい若者が此始
末であるから、面喰つてきよろしくするばかりで、急に行々子の

囁りを止めた。

照れ隠しに

「藝妓はんを呼びまひよか」と、局面を變へやうとするを

「晝前から藝妓なんか呼んぢやア鼠が小便を引ッ掛けるせ、臺灣の鼠は鼠疫の本家だ、たまるもんか」

赤石が忌ましくしさうに顔を顰めて、憤つたやうに冗談を云ふ。すると莊田は鷹揚に笑顔を見せて

「さう君のやうにぼん／＼云はんもんぢや、なア姐さん、此男は藝妓より姐さんに居つて貰つた方がえゝちふぢやけど、初心ぢやから、よう左様云はんのぢや」と、例の九州臺の合の子辯で調停を試みたが、氣を變へて一寸首肯き

「ぢやけど、我々は内證の相談があつて來たゞから、姐さんにも

一寸遠慮して貰はんならん、時々銚子の代りを持つて來て呉れる外にや、手を鳴らさん中は出て來て呉れんでもえゝわ」と體好く追ひ拂ふ。

「あゝ左様か」と、女中はやゝ面目を施して、それを機會に立つて行く。

「はゝゝ、輕便主人いや莊田君却々旨い、其筆法であの細君も手に入れたんだな」

銀月が餘りの無遠慮に、流石のカイゼル鬚も

「馬鹿云へ」と笑ひながら、少し顔を赤くするを免れなかつた。

無頼着の總大將赤石迄も、やゝ呆氣に取られた様子である。

大阪流の鋤焼に、淡水河の鯉の洗肉、齧の旨煮など、原料は臺灣産だから大味で内地の口に合はないけれど、見た所可なりに立

涙な献立である。

「やア、輕便旅宿の糞物と露物に惱された胃袋へ、急にこんな御馳走を詰込むんだから、腹の蟲が嘔吐りするだらうなア」
「相手は食へない男らしいから、どうせ打突かりついでに、何所迄底があるか敲いて見やうと、憎まれ口を利きながら、馬が草を噛むやうに荒食ひする自分を、莊田は熟々と興に入つた顔で眺めて居たが

「君、ちいツと控へて呉れ、御馳走は逃げて行かんから、緩りやつた方が身體の樂だぞ」と、諭すやうに優しく云ふ。

「自分は、さう云はれて箸を措くや、俄に氣が附いて膝を打ち、
「む、何か僕に相談があるさうだね、先づそれを聞かして貰つて、それから緩りと御馳走を頂戴しやうか」と容を改めた。

莊田は仔細らしく首肯いて、其カイゼル鬚を拵り始めた。

「どうぢやな、君も折角臺灣にやつて来たのぢやから、荒尾さんが死なれたからつて、おめく」と内地に戻られもせんぢやらう、そこでぢや、臺灣で面白い金儲事業があつたら、一番やつて見てもよからうぢやないか」

先づ、氣を引いて見ると云ふ筆法である。

自分には驅引も何も無い。

「む、金儲事業があるなら、僕も仲間へ入れて貰ひたいな、荒尾先生を便りにすることが出来なくなつたから、責めて金でも便りにしなければなるまい」と、無雜作に投げ出す。

莊田の鬚は更に見慮めな程拵り上げられた。
「此所に若し確實な金儲事業があつたら、君の働で資本主を求め

「幾何の資金があればいいのか、自分は何所迄も無難作である。」

「さうさ、一萬あれア十分ぢやけど、五千でも出来ん事は無い」

「そんな事が」

詰らなさうに自分に鼻であしらはれて、
莊田は其炯々たる眼光を脆くも壘へ落した。

「僕も、失敗の揚句、あないな木賃宿然たるもの、主人に迄成り下つた上ぢやから、どうしても、始から太い仕事は出来んのぢや」と極り悪さうに云ふに押冠せ

「僕の友人には、金持が幾個も居るから、五千や一萬なら、資本主を求めるなんて、そんな形式的の事をしなくつても、僕が一走り内地へ行きさへすれば、引撥んで來られるんだよ」と、赤石が

持つて居る巻煙草を黙つて取つて、言語と共に煙を吹出す銀月。

「君を非凡の人と睨んだ僕の眼が、果して狂はざつた、我輩を煽立てる言語を己が自慢に託して出す莊田のするさ加減。」

「けれども、其事業にも依るね、騙引は用ひないけれども、憚り乍ら、苦も無く人の手に乗るやうな淺墓者でもないのである。」

「樟腦製造業ぢやが、此通り、山主と契約した書面も持つとるけど、今の僕にや、急に資金を調達する當てが無いで、どうもならんちふ次第ぢや」

「む、樟腦製造業か」

莊田が懐中から取出した袱紗包を引寄せて、皮を剝くやうにぞんざいに開いて見ると、臺灣人との契約書を始め、精細な收支の見積書が現はれ出た。

一應目を通して暫く思案をする。

「赤石君にも相談をしたのぢやが、どうも今は金を引出す當てが無いちふぢや、」莊田は是非にと云ふやうに自分の顔を覗き上げる。

「おい伊藤君、そんなに金持の友人を多く持つてゐるなら、ちと引出して使つてやれ、使つてやるのは外科療治だよ、慈悲だ、功德だ、何をそんなに考へることがあるんだ、赤石は直接の當事者でないだけに、無責任の批評を縦にするのである。

それらを耳にも掛けず、なほ頻りに首を拈つて居た自分は、心機開く所自然に莞爾となつた、好し、これぞ自分の爲の活路であらう、樟腦製造は果して十分に見込のある實業であるかどうかは、自分其方に経験が無いから判らないが、此男共は滿更自分を詐欺しやうとて掛るのでもないらしい、兎に角眞面目に一つの事業に

掛らうとするのであらう、そんなら自分も之に關係して、證據物を携へて内地へ歸り、資金の運動をして見たつて、別に悪い事ではない筈である、悪い事ではなくつて自分の爲に活路になるなら、此際何を躊躇することがあらうと、獨り首肯いて首を豎に仕直した。

「宜しい、其資金は僕が持つて來やう」

すると莊田は意味のありさうな笑顔になつて

「さうして呉れると有難い」と一つ言葉を切つたが、それから直ぐに後を追うて

「そこでぢや、もう斯なると、君から宿錢を取らうなんぢふ考へはないぢやけど、君だつて小遣も要るぢやらうし、それに失敬乍ら、何時迄も其着物で居られやせんぢやらう、ぢやから、内地へ

手紙をやつて、ちいッと金を取つちやアどうぢやな』と、此上無い真面目顔になつて結びを着ける。

これを聞くと、自分は

「はよよ」と、腹を抱へて笑ひ出した。

取つても附かない所で、出し抜けに笑ひ聲を擧げたので、莊田も赤石も目を圓くする。

「何がそないに可笑しいのぢや」

「どうしたんだえ」

二人が言語を重ねて訝るを、自分はなほも引つくりかへるばかりに晒つて

「輕便主人、僕を試験しやうとするんだな」と叫ぶ。

「いや、そないな考へは持たん」

「いよよ、試験したつていよよ、それくらゐ用意周到でなければ、一つの事業が出来るもんぢやアない、伊藤銀二謹んで君に試験されやう、むゝ、此袱紗の中に頼信紙もあるね」

云ひさま衣嚢を探つて鉛筆を取出し、書類と一緒に畳み込まれてある頼信紙を抜取つてさら〜と書き認め

「僕には金が無いから、君之を出して呉れ給へ、其代り、二三日の中には、僕の小道も、着物代も、内地へ行く旅費も、電報爲替で来るだらう、若し来なかつたら試験に落第だ」と投げ出す。

宛名は羽後大曲町の小西平藏、差出人は臺北府北門街三町目莊田八五郎方伊藤藤銀二で、單に、荒尾先生に死なれて一時死地に陥つたから、新なる活路を見出だす迄の費用として、二百圓電報爲替で送つて呉れと云ふのであるが、電報にすると随分長文である。

「これア、伊藤君は僕より一二目上手かも知れん、先手々と打たれるから、苦しうてどうもならん」と、莊田は敬服する、自分は事も無く笑ひ流して

「僕には驅引と云ふものがない、自分の頭腦で解釋した通り、露骨に實行するのが僕の流だ、其積りで交際つて貰はう」とぶつきら棒に挨拶する。

「それがえ」と、莊田は又も敬服の體。

此に至つて、今迄餘計物を云はなかつた赤石が、莊田を推退けるやうな身構へになつて、自分へ正面に向き直る。

「おい伊藤、君に驅引の無い事は判つたが、若しだ、假にだ、いか、莊田の方に大なる驅引があつたらどうする、君を其驅引に乗せて、道具に使つたらどうする、之に對する君の態度はどうだ」

固くなつて語尻に力を込めるのである。

けれども、自分は平氣である、何の思案も費さずに、口先から自ら言語が送り出る。

「いゝさ、今も云つた通り、僕は唯だ僕の頭腦の解釋に随つて行動するんだから、どんな結果にならうとも、自分より外の者を責やアしない、いや、責めるの責めないのと、そんな固ッ苦しい事を云ふ迄の事も無いのさ、荒尾先生に亡くなられた爲に悟つたと云ふ譯でもまあまいが、僕は、何時でも平氣で死ぬさうになつた、既に死ぬ事が平氣なくらゐに土臺を固め得たら、人間世界の事は何方に轉んだつてすべて面白からうちやアないか、五千でも一萬でも、出す力のある奴に出させるんだ、それが役に立つて大事業の原料になれば頂上、又見事に失敗して一文残さずになつたつて

差支へがないさ、成功に興味があるなら、失敗にも亦興味が無ければならない、面白い滑稽趣味は却つて失敗の中に含まれて居るもんだ、それに、夜の次には又晝が来るんだと思やア、其夜が却つて楽しみぢやアないか、そんな事に態度も絲瓜もありやアしない』

「む」

我意を得たりと赤石が唯だ首肯いて止んだのはいゝけれども

「眞誠に敬服した」との莊田の調子が、今迄に無く高い餘韻を引いたので、自分は端無く注意を引かれた。

見れば、満面に感動の氣が波打つて居る、之に依つて推測ると、今迄の莊田の敬服は眞誠の敬服でなくつて、虚偽の敬服であつたのか。

なか／＼するい男である、けれども、するい底に打てば響く所

のある男である。

羽後の大曲へ電報を打つたのは無論自分の窮策ではあるが、亦確に信するところが無い譯でもない。

小西氏は俠骨を抱いた富豪で、自分とは中學時代の同級生である、これまでも五十圓三十圓と困る時に出して貰つたことが幾度もあるから、此場合豈夫自分を見殺しにしないだらうとは、自分の過去に依つて推し、且つ信する所である。

斯くて、小西氏から金を送つて寄越したら、直ぐに内地へ飛んで歸つて、若し都合が好かつたら小西氏に資金を出して貰はうし、さうは行かなくとも、他に、確なる出金の當てがある、其爲、土臺から平氣に構へて無雜作に事を運ぶので、敢て自分が大膽不敵なる故ではないのである。

斯くて、自分は輕便旅宿の泊り客と異つた待遇を受け、赤石と一緒に土間の左の方に移されて、主人夫婦の居間に隣つた此家第一の立派な座敷に陣取り、三度の食事も主人夫婦と膳を並べて、牛の鳥の鯉の籠のと贅澤が並べられるやうになつたが、成算があるから、それをも辭ます、不相變平氣な顔をして、特別の待遇を尋常に受けて居る、金を取つて泊める客には、雪駄の皮の糞物や、豆腐の幽霊を雨水に浮かした露物を當てがつて置いて、内端の者は榮耀食の選り嫌ひ、それも傍に見せびらかして置いてとは、何たる無法な宿屋であらう、けれども、こんな事は要するにどうでもいゝのである。

電報を出してから四日目に郵便配達人が入つて來たと思ふと「伊藤君、認印を持つとるか」と莊田が晴々しく呼ぶ。

むゝ來たかと、待設けた胸の中で叫んだが、我慢が強いから、寢そべつた儘に氣の無い聲で

「認印も實印も、印判なんか持つてるもんか」と劍突を食はした。

「印判を持つて居らんちふて、威張つとる」と、驚き呆れたやうな獨語が聞こえたが

「代印で受取りませう」と、配達人に向つて云ふ様子で、應て大聲に

「來たぞ〜」と呼ぶ。

自分は態と知らぬ顔をして、赤石と最前からの談話を續け

「成程、それぢやア君は、臺北へ來ると何時でも此家へ泊り附けて、其爲に莊田君と心安くなつたんだな、さうして、君も矢張樟腦製造業に全身を委ねる氣かえ」と訊ねる。

「む、僕の目的も君と同じく支那にあるんだが、矢張り極まつた金の出所が無いと困るから、君と莊田君とを結び着けた功を以つて、儲かつたら時々融通して貰はうと思ふけれども、此度は民政局長官の周旋で上海へ行くことに定まりさうだから、さうなつたら、君が内地へ行つた後で出立するかも知れない、赤石も呑氣に構へて、自分の身の上の事を悠々と述べては居るが、郵便物が氣になると覺しく、帳場の様子にもよい／＼耳を側てるのである。がらりと紙門が開いて

「そら来た」と莊田が投げ出すは、云ふ迄も無く電報爲替の通知書である。

「あゝ来たか」と軽く云つて、例の無雜作に封を破れば、其頃の郵便局で取扱ふ爲替の一口は三十圓迄の制限であるから、通知書

の數は七枚、正しく請求通りの二百圓である、多謝す、此時の小西氏の恩は、終生肝に銘じて忘れまい。

「どうだこれで試験は及第だらう」
「始から斯うちやらうと、見込んで、ちやんと及第點を與へてある」

莊田もこんな場合にまごついた挨拶をする男ではない。

「そんなら、これから取りに行つて、明日立つことにする、あゝ印判が無かつた、まゝよ、印判師へ寄つて大急ぎで彫らせやう」と、今迄の糞沈着に引換へ、急に眉毛に火が附いたやうに騒ぎ出す。

「動かざること山の如く、疾きこと風の如しかな」と、莊田は例の嘲けるやうな譽めるやうなやく／＼笑ひ。

「其代り、晩には盛に奢るぞ」と、あたふた洋服に着換へる自分
莊田の目には如何に若く映じたであらう。

其四 零落

思ひ掛けなく臺灣で頼み切つた人に亡くなられて、脆くも死地
に陥つた果に、棄鉢の度胸を人に買はれたのを幸ひ、運試しに投
げた賽に好い目が出たので、世の中が却つて今迄より面白くなり、
際どい所で新しい人生觀を捏ね上げ、今迄の活氣と功名心との肉
塊に、洒然超脱した所と多少のするい所とを加味して、僅の間に
餘程複雑な人間となつた積りの自分は、得々として一時内地へ戻
つた所が、小西氏よりは資金が出ずに、運動費として三百圓の支
出を得ただけにとゞまり、更に、東京へ引返して、これは、臺灣

に行く前特に自分を招いで送別の酒を酌み、臺灣へ行つて金儲け
の口が見附かつたら必ず知らして呉れ、金も出さうし、出掛けて
行きもしやうと、繰返して云つたのであるから、必ず話に乗るだ
らうと思はれる友人○○○○を敲いた、然るに、此友人は非
常の放蕩者で、親父に金を出させて自分と一緒に臺灣へ行かうと、
極めることは極だが、臺灣へ行つたら、常分内地の遊樂に遠ざか
らなければならぬから、内地との別れに一つ痛快な遊びをしや
うぢやアないかとの發議をなした、それを戒めて醬を食ませるの
が其時の自分の責任であるのに、迂濶にも大賛成で同意したのが
失敗の本となり、兩人で散々馬鹿を盡くして、今に親父から纏ま
つた金が出るからいと羽目を外し、其爲、名譽でない性質の借
金迄もしたので、とう／＼友人の親父の耳に入り、金を出すどこ

ろか、あべこべに友人は親父の嚴重なる責罰に逢ひ、禁錮同様の身となり、親父の目から悪友と見えるところの自分との交通を差止めらるゝに至つた。

かうなると自分にも云ひ分がある。自分は進んで放蕩の加勢をしたのちやアない、小西氏が折角の好意で出して呉れた三百圓を、放蕩の加勢として使ふは自分の本意ではなかつた、たゞ、必ず五六千の金が出されると云ふから、其運動費の積りで、友人が七分支出すれば自分は三分負擔しつゝ、緑酒紅燈の間を奮闘し廻る間に、だん／＼耗つてとう／＼無くなつたのである、けれども、今更そんな事を云ひ立てゝ友人を責めたつて、何の甲斐あるべき筈無く、結局こんな運命と諦めるの外は無いのである。

斯くて、友人の運命の急變したことを知つたのは十二月八日の

夜であつたが、同時に、自分の運命も亦一分時間の猶豫無く急變した、自分の懐中に残るものは、今やたゞ一圓内外の遣ひ残りに過ぎぬのである、小西氏には何面目あつて再びかうと申出られやう、又考へて見ても、外に金が出るべき口を求めざる當てが無いから、臺灣の莊田に對しても、何と云ふべき言語があらう、加之、既に小西氏に向くべき面皮が無い以上、同じ國の自分の父母の家に歸つて、おめ／＼として居られた義理では無い、こゝに於て、自分は又臺灣以來二度目の進退兩難に陥つた、お負けに、此二週間ばかりは、宿も定めずに、友人と二人倒れた所に泊つてばかり居たのであるから、運命の急變は、昨日の大盡を今日の宿無しにして了つたのである。

けれども、思ひ直して臺灣の事を回顧すると、これも亦左迄驚

くに足らない、自然の成行と心の赴く儘とに任せて、運命が此次の幕をどう云ふ筋書にするかを試すも、亦た一興であらう、まよよ、今晚は先づ上野の宿屋に泊つて、明日の事は明日の朝に考へやう。

斯う思ひ定めると氣が改まつて、牙え渡つた星空を見上げる心地、今迄に無い清々しさである、どうツと中天を鳴渡る物があつて、夜嵐颯と颯し來ると、もう落盡して落つべき葉が残らぬ筈の上野の森が、無理に搾つて振出したやうに、からりと枯葉を人に浴せる、自分は今向ヶ岡彌生町の友人の家を去つて、上野の山下道を歩いて居るのである。

公園前へ出ると

「旦那、廓門迄参りませう」と

車夫に聲を掛けられて

「馬鹿め」と思はず叱り着け、後で獨り可笑しくなつた。

足の向く儘に入り込んだのは、埼玉屋とか云ふ宿屋である。

夕飯が抜きになつたので、宿料は少し廉くなり、七十錢拂つただけで済んだが、それでも、斯うなつてからの自分に取つては大金である、茶代も置かず、女中の心附もせず、翌る朝肩身狭く立出でよからの懐に残るは、僅に四十錢に充たない、さア、愈々真誠にこれからが自分の世界である。

「先づどうしやうか」と、宿屋の前に立つて左右を眺め渡した。

「むゝ好し」と首肯くや、走り寄つて閃然と飛び乗つたは、品川の鐵道馬車である、無論、此時にはまだ電車と云ふものは無かつた。

眼鏡で降りて小川町に向ひ、錦町二丁目の清水屋と云ふ質店へ入った。

「被入いまし、久しく御見えになりませんでしたねえ」と、番頭が愛想好く迎へる。

人間久しく見えないからと云つて質屋に訝かられるやうぢやア、仕様が有りやアしない。

「これに幾何貸して呉れる？」と、先づ外套をかなぐり棄てた。

けれども、それを出すのではない、矢庭に高貴織の羽織をばさりと引脱ぐや、丸めて無雑作に抛り込む、又もや、以前の無雑作癖の自分に戻つたのである。

「結構な御羽織ですな、御仕裁てなさる時には餘程掛りましたらう」と、拈くり乍ら感心する番頭。

何も感心すべき品ではないのであるが、番頭め、以前の風吹鳥のやうな服装の自分を知つて居るので、それに引比べて斯う云ふのであらう。

「なに、それア古着屋で買ったんだ」と云つて

「これも遣らう」と、懐中時計をぶら／＼振り下げて出す。

これも近頃買ひ求めた物である。

「幾何御入用です？」

「入用には限りがないが、ぎり／＼決着の所で幾何貸して呉れる？」

「左様ですな、御羽織は裏地が少し弱つて居りますし、御時計の方は只今流行らない型ですからな」

「は、極りを云つてる、兎に角幾何だ、朝商ひだから、此方か

ら負けてやらア」

「へー、旦那は御淡泊して被在います、ぢやア大奮發致しまして、御羽織を六圓、御時計は五圓と致しませう」

「面倒臭い、大負けに負けてやれ」

十一圓引擡んで戸外へ飛出す。

面白いや、此金が無くなつたら、今度は外套を飛ばさう、次には、縮緬の兵子帯を飛ばして木綿紋のにしやうし、其又次には、米琉の綿入を飛ばしてどんつく布子にしやう、前途まだん、頼しい」と大笑ひして、先づ小川町の通筋をぶら／＼する、中西屋の前を通りかゝつたので、ふと零落の伴侶を求めぬ氣になり、ミルトンの失樂園を一部買つて懐へ入れた。

すると、此外に唐宋詩醇抄が欲しくなつて、眼鏡から上野迄鐵

道馬車で引返し、徒歩で池之端の琳琅閣に向ふ。

琳琅閣で、黄表紙四冊續の小本を買つて、ミルトンに加へて懐を膨まし、欣然として寶丹の方に向ふと、池の方から横町を來た人間が、突然

「おや」と聲を放つた。

おやと云ふからには女であらうが、何者の女が何故おやと云つたのであらうと、ほんの好奇心だけにちよと横向けば

「矢張り伊藤さんだつた」と、其女が走り寄るのである。

走り寄る女を見ると、自分も思はず立淀んだ。

「やア、すみれ家紫子君假名か、流石は品格と自由とを重んずるハイカラ藝妓だけあつて、池之端から堂々白晝の御歸館とあるね」

「人間が悪いわ、辨天様へ御参りに行つたんですよ」

「其云ひ暁、暗いく、ハイカラと迷信とは縁が遠い筈」
「だって、わたしは、子供の時分から辨天様だけを信心するんですよ」

「それならそれでもいいが、變つた所で逢つたね」

先手々々と續けさまに二つ打たれて、女もやゝ旗色が悪かつたが、自分の方から受身になつて出たので、吻と息を吐くと共に、隙かさずぼんと打込んで来た。

「貴下こそ、今頃此邊を御通りなさるは、何所かの御歸りに定まつてるわ」とじろり。

「さうさ、羽織迄取られッちまつて、御覽の通りの姿と來てる、そから見給へ、時計も無からう」

「まあ、どうなすつたの」先の先を越されて茫然の體。

それは、昨日迄自分が友人の馬鹿を盡くす棒組になつて居た間の、馴染の藝妓の或一人である。

「どうもしないよ、一文無しの素寒貧になつただけさ」

「嘘でせう」

「おれがこんな事に嘘を吐くもんか」

「ちやア、これからどうなさるの」

「遊び腐らした頭腦を鍛へ直すのは旅行に限るから、これから東京を去らうと思ふ」

「御金が無いのに」

「金が無くつても旅行は出来るよ」

「何方へ被赴るの」

「東北の方に向ふ積りだ」

「御歩行で？」

「さうさ」

「まア、此御寒いのに東北の方へ」

「寒いから行くのさ」

「懐中のは御搏飯？」

時計も無くしたことを見せやうと、外套の胸を開いた時に、懐の膨れて居るに目を着けたのであらう、此奇問に、自分も一寸呆氣に取られて、笑ひ出す迄には餘程手数が掛つた、

「これア面白い、實に奇抜な觀察だ、成程、徒歩旅行には搏飯が付き物だ、見て貰ひついでに之も見て貰はうか」と、懐中の書籍を重なつた儘に掴み出すと、ミルトンの表紙の金文字が燦然と女の目を射る。

ハイカラ藝妓の估券問題である。

「バラ、バラダ、バラダイス」と一生懸命になつて讀みこなさうとする。

自分は急に一種の感慨に襲はれた、昨日迄は自分を人間の快樂に耽らしめた相手の一人、それと思ひ掛け無く途中に出逢つた所の自分は、ミルトンの失樂園を懐いて、寒空の無錢旅行に出やうとして居るのである。

藝妓と失樂園の詩と、何たる飛び離れた對比であらう、而も此際、何たる意味のある對比であらう。

「いゝよ、往來で君の學問を見せなくつてもいゝよ」と、自分は又それを懐へ收める。

「搏飯だ、搏飯だ、僕の搏飯だ、紫子君縁があつたら又逢はう」

と云ひ棄て、廳然杖を拂ふ。

『もう御晝に近いでせう、我家で御飯を上つて被行いな』と、女は一足だけ後を追ふ。

寧ろ、後を追ふ容を見せる。

『有難う、其晝飯を、僕が旅行から歸る迄預つて呉れ給へ、まア歸るものと定めて』と、自分は逃げるやうに遠ざかつた。

其五 土方となる

まだ水戸を見たことが無いからと、千住から踏み出して先づ水戸へ行き、水戸から更に宇都宮に向つた。

固より急がぬ旅の、意味も無く唯だぶらぶらと歩き、腹が減ると食ひ、草臥れると休み、日が暮れると宿屋に草鞋を脱ぐと云ふ

始末なので、日數のかゝること夥しく、初の中は、粗末な商人宿に泊つて居たのが、段々に下つて、商人宿と木賃宿との間に位する宿から、純然たる木賃宿の果迄窮めるやうになり、それも財布に物のある中は好かつたが、何時しか空になつて、先づ外套を脱ぎ、次には兵子帯と別れ、宇都宮の木賃宿に着いた時には、白銀の大塊を置き並べたやうな日光那須の連山から吹き嵐して、遮る物無き平原を切り捲る刀の如き風に、古着屋物の薄手な米琉の綿入を吹き透されて、全身黒く紫に變り、木綿絞の兵子帯の繩と振れたのも、自分を乞食書生と見せるやうになつた。

宇都宮の木賃宿は女主人で、主人らしく振舞ふ男は其實泊り客のするくべつたりになつたものと、氣を附けて見ると判るのである。外に、女主人の妹らしく、二十餘りに見えて七八つの子

供のやうに顔はない所の、鼻の下に薄鬚が生えた女が居る、世間ではこんなのを白痴と云ふ。

着いたのは、いづれ雨か雪にならなければ已まぬべき、十二月中旬の鉛を張詰めたやうな空の、暮れるにはまだ少し間のある時であつた、寒くつて堪らないので、宿の者共の間に割込み、圍爐裡の焚火に暖ると、自分と並んで膝を抱いて居る親仁が

「御容さん、繪を御描きなさるですけえ」と話し掛けた。

自分は乞食書家と見られたのである、而も、其以前京都から東京迄徒歩で歸る時、乞食書家と見られてから、これで二度目である。

「いや、さうぢやアありません」と軽く答へて、差當り處置しなければならぬ問題に移る。

「御内儀さん、僕は此綿入を賣るか質に遣るかして、もつと悪い着物に換へたいと思ふんですかね、御禮をしますから、どうか始末して下さいませんか」と切り出す。

屋根代は着いた時に出して置いたが、夕飯を取るに困るからである。

かう云はれて、女主人は、改めて自分の風體をじろゝやり始める、主人らしく振舞ふ男も、白痴の女も、傍に居る親仁も、俄に目の光を別にして押黙る。

やゝあつて

「それア、質屋を御世話する事が出来ねえ譯ぢやアねえだけど、傑え立派な着物でがすねえ」と、女主人が覺束無げに口を開いた。此見萎らしい服装を、傑い立派な着物だと云はれて、自分は一

時肝を潰し掛けたが、言語の裏に包まれる意味が判つたので、首肯き乍ら笑顔になつた。

「成程、素性の怪しい奴と思ひなされるのも無理が無い、けれども、僕は酔興でこんな旅をして歩くんで、始め東京を出る折には、羽織も外套もあつて、帯もこんな薄ッ汚い乞食じみたのを締めて居たんぢやアなかつたけれども、水戸へ行つてそれから此方へ来る間に、一枚脱ぎ二枚脱いで、とうとうこんな有様になつちまつたんです、決して泥棒でもなければ、人の物を着逃したんでもありません」と説明すると

「ハッ、乞食でねえの泥棒でねえのツて、大きな聲で氣障な事を吐しやアがる」とぶつくと云ふ聲が、片隅に轉がつて居る柏餅の中から起つた。

柏餅の小言も絶えると、何れも木像のやうに押黙つて仕舞つて、たゞ焚火の焰ばかりぼうくと音を立てる。

一切り、ざアつと自分の背中を打つやうに吹き込む雨。
「お半よ、戸口を締めて来うよ」と、主人らしく振舞ふ男が云つた。

「松さん締めねえな」と、白痴の女が其薄鬚の生えた鼻の下をもぐぐとさせる。

主人らしく振舞ふ男の名は松さん、馬鹿の名はお半と判つた、松さんはいゝが、芝居で見のお半長右衛門のお半と此お半とを比べて見る氣になると、吹出さずにやア居られない。

「白痴にやア勝たれねえ」と呟いて、松さんせう事なげに立上り、入口の柱に手を掛けて、腐つたやうな襦袢に包まつた身體を斜に

延し、がらくと戸を引寄せてびしやりと締切つた。上半が障子になつて居て、醤油で染めたやうな紙に木賃御泊と書いたのが家内から左文字になつて見える。

「寒い、寒になりさうだ」と、さもく寒さうに息を吹きふき云つて、松さんが元の座に戻ると、女主人は口を曲げて枯柴をへし折り、焔の中へ投げ込む。一座又だんまりになる。

「む」と、膝を抱いた手を解いて胡坐になつたのは、自分の隣りの親仁である。

「御客さん、廉けれや私を買うべえ」と、自分の方へ少し身を拵り向ける。

「買つて呉れますか、廉いにも高いにも、僕は自分で値段を云ひ

ません、幾何なら引受けて呉れるんです？」

「どうせお前さんは、それに代る着物が要るだんべえ」

「さうです」

「そんなら、かうしたらどうだ、私が上に着き居る布子へ五貫附けて、取つ換へッこをしたら」

「む」と、自分は其上に着て居る布子なるものを見遣つた。

紺木綿の筒袖綿入で、もう白剥けた上に、肩のあたりが破れ掛り、それに、袖口と胸と膝の當る所とが、何かは知らず光る程汚れて居る、買ふ時に八圓出して、亂暴に着こなしたとは云ひながら、まだそんなに價値の落ちない品を、これへ僅に五十錢添へた所の、總計一圓ばかりの、物と交換するとは、今の身にしても餘りに慾を離れ過ぎた態度と、やゝ躊躇し掛けたが、思ひ直して、

何をこんな詰らぬ事に心を使ふと自分を叱つた。

「宜しい、そんならさうして貰ひませう」と早速立上つて帯を解く。

親仁も之に連れて布子を脱ぐ。

「絹形附の胴に鼠縮緬の袖の通つた袴襦一つになると、何れも氣の毒さうに自分を見上げる。

此方は些も疑議せず、親仁が脱いだ布子を取つて、つぶりと袖を通す、筒袖であるから、襦袢の袖が腕に搦まつて、どうも氣持が好くない、それに、着て見て始めて、此布子に生臭いやうな鹽臭いやうな異様の臭氣があるを知つた。

「爺さんの商賣は魚屋さんかえ」と帯を締め乍ら訊ねる、着物が改まると共に言語も改まつた。

「え、鹽物や干物を商ひます、氣の毒に思ふのらしく、親仁の言語遣ひは却つて叮嚀になる。

此對照の變化が、傍觀者には、頗る妙に見えたのであらう。

「へえ、そんなら五貫」

「やア、有難う、どうだ似合ふだらう」と自分はどつかり大胡坐。

「時に爺さん、僕は明日から手足を働かして稼がなければならぬが、何か仕事はあるまいか」と、宿の者は話にならないと思ふから、何所迄も親仁に取絶る。

「無えこともありません、骨が折れても構はねえなら」

「構はないどころか、却つて骨の折れる仕事を望むんだ」

「そんなら、明日の朝私と一緒に御出でなせえまし、土方の親分に頼んで上げますべえ」

「それア有難い」と、自分は自分の境遇の大變化に非常の好奇心を起した。

戶外を重さうに荷馬車が通る、びしりと馬の尻に鞭を當てる音がする、木賃御泊と書いた障子の破れ目から覗けば、雨が何時しか雲を雜へて、醬油色の紙に焦げたやうな黒みを掛けて見せる。

翌る朝は、魚屋の親仁に連れられて木賃宿を立出でた、此親仁は日光街道の鹿沼に家を持つて居る者で、宇都宮で仕入れた鹽魚乾魚を界限數里の間に擔ぎ廻つて商ひ、かうして木賃宿から木賃宿へと泊つて歩くのださうである。

自分と交易した着物をば襦袢の上に着込んで、其上に古びた手織木綿の布子を重ね、看守の着るオーバーコートの下裾がぼろぼろになつた奴を上羽織つて、天秤棒を擔いだ親仁に、昨日迄親仁

の物であつた紺木綿の筒袖綿入一枚を生命と頼んで、蝙蝠傘を脇挟みつゝ、胸を抱くやうに緊しく腕を組んだ自分、件の服装で裾を端折り、紀州ネルの下股引に、破れた紺足袋の草靴穿き、それに白ツちやけた中折帽子と云ふ打扮は、木に竹を繼いだやうなと云はうか何と云はうか、路傍の床屋の鏡に映して見ると、笑ふにも笑はれぬ異形さ加減である。

「爺さん、べら棒に寒いぢやアないか」

「むゝ、寒いねえ、だけど、御天氣がいゝだから、だんく、暖になるだんべえが、どうでえ、此路の悪い事は」

「さうだな、まるで汁粉の餡の中を歩くやうだ」

此に至つて、親仁も自分も同じ階級の人間である、寧ろ、親仁の方が一枚上手である、昨日暫くの間叮嚀な言語使ひをしたのは、

自分が急に落魄の姿に變つたことを氣の毒に思つたからであらう、それも一晩寝て起きると、いゝ加減の人間の歴史は消されて仕舞ふもので、親仁はもう現在の人間として自分を待遇するのである。全く此朝の寒さと路の悪さとは、べら棒と罵るに相當して居る、昨日の寒で、底からどろ／＼に湧き返つた往來は、朝の凍じの厳しさに、一時寒天のやうに固まつたのであるが、蚤くも馬の蹄車の轍に踏みこなされて、細長く限りの知られぬ泥沼に變じたのである、それを、日光風が刷毛のやうに撫でると、見る／＼灰色した薄皮が張りさうに思はれる。

宇都宮の町を北へ出ると、寒さも路の悪さも、更に一皮剥いたやうに激しい。

「どうでえ、其手で土方稼ぎが出来るけえ」と振り返られて、ふ

と氣が附くと、自分は何時しか立停つて、紫に膨れた指先を吹いて居るのである。

成程、擊劔や柔術は、少年時代に身を入れてやり、今でも、木太刀を振り廻したり、鐵匠鈴を弄つたり、たまには慰みに鐵の柄を握つたりして、身體を強くすることに氣を附けて居たのであるが、生れ附いて肉柔い尋常の手は、自分が見ても勞働に堪へやうとは思はれない、況して、親仁の目に覺束なく映るのは當然である。

「何だつて、世の中に遣つて出来ない事があるもんかね」と自分は追ひ附いて自棄に威勢のいゝ聲を出した。

「そ、その氣なら大丈夫だ、そんなら此方へ來ねえ」

「何方へ行くのかと思へば、親仁は往來から横に切て、裸木の目

に寒く立並ぶ冬木立へ、ざくりと霜柱を踏碎いて入るので、後れじとこれに續く、脛迄泥塗れになつた濡足の霜柱に觸れる心地は、骨の中へ何かを注ぎ込まれる様である。

驚々と人聲がして、枯葉の焼ける一種芳ばしく鋭い臭ひに鼻を打たれたと思つて、頭を昂げると、前面には古い杉の木が三本眞黒に立つて、根元に手で持上げられさうに小さな石の祠がある、親仁が其杉を左に廻つて行つたので、後から足跡の通りに追掛けやうと、黙つて小便を仕始めた。

すると、其驚々する人聲の中から

「おい若えの、何して居るだア」と呼ぶ親仁の聲がする。

若えのと呼ばれて、軽い返事が一寸出ない、仕方が無いから、きツかけが悪いけれども、のそくと面を出す、野天の焚火を圍

んで、十人ばかりの勞働者が居るのである。

「此方へ來う」と願で招かれて、銀月半文の價値が無い。

「親分、此若え者です」と紹介すると

「む、貴様辛抱が出来るか」と自分をぐつと睨み附けるは、鳥

打帽子を氣取つた風に冠り、腹掛半纏の上に厚いオーバコート

を着て、割合に上等の靴を穿いて居る所の、眞黒々の四十男である。

貴様と頭から噛みこなされ、自分も一時は面喰つたが、此所ぞ

と度胸を据えて

「え、出來ます」と睨み返す。

「そんなら遣つて見ろ」

これで話が決つた、繁文縟禮の弊は此社會のものぢやアない、世間萬事、皆此筆法で簡明にやりたいものである。

親仁は干物を土方共に商つて還る。

伊藤銀月は土方の仲間に入つた、語を換へて云へば新米の土方になつた、もう一つ語を換へて云へば土方の見習になつた。

此時此所の土方の仕事は、汽車の線路を換へるに就いて、木立を切開いた野を、更に掘返すのである。

「おい、貴様其畚の先棒になれ」と親分に呷鳴られて、勝手が判らないからさよろくして居ると

「此木然人め、なんだつて、豆飯碗食つた鳩ぼつぼ見てえな面アしてゐるだア」と、太い竹の先で、強くはないけれども後から腰骨を突かれた。

跟めきはしないが、悔りして飛び退くと、積んである砂利に諸足を踏込んで、其爲に脆くも尻餅を搦いた。

「わアい」

「ざまア見やアがれ」

「意氣地のねえ野郎だなア」

「今迄何をして居やアがつたんだ」

口々に罵られて憤然と起上り、今腰骨を突いた者は何奴だらうと打見れば、腰を突いたばかりか、其竹を鼻の先に突着けて冷笑して居るは、二十五六の田舎臭い若者である。

「失敬な奴だ用があるなら口で云へ」と、こんな時になると、自分乍ら驚く程高まる調子を、張り切れるばかりに張り上げた。

「御前さんが此棒の先を御昇ぎなさるだアよ」と鼻でふん。

「いくら酔興だつて、己等に馬鹿にされやうつて、こんなざまになつたんぢやアないや、今迄何をして居たと、今迄はな、羽二重

の積鼻權を一日に一筋づゝ打棄つて、百圓紙幣を紙振にして煙管を通してたんだよ、餘り榮耀榮華を仕飽きたから、洒落に土方をして見やうと思つて、態々宇都宮くんだり迄遣つて來たのさ、泥棒も遣つたし人殺も遣つたんだけど、土方だけはこれが皮切なんだから、そんな意地の好くない尻穴の狭い真似をしす、知らない者は知らない者のやうに、かうするもんだあゝするもんだつて、親切に教へて呉れ、なア、同じ亞細亞洲の人間ぢやアないか」銀月一流の痰阿の切り方に、さしも溢れ者の土方儕も呆氣に取られた様子で、目をさよろくさせるばかりである、今度はあべこべに、奴儕こそ豆鐵砲を食つた鳩になつた。

親分はどうであらうと打見れば、たゞ苦笑ひをして居る。

自分は、此社會を押通ること亦左までむづかしくないものと

微笑んだ。

「そんなら鼻がう、兄貴頼むよ」と、掻い潜つて棒を肩に掛け

「そらどつこい」と腰を伸して

「はッはッはッは」と高く晒ひ

「これア譯ア無いや、思ひの外に面白いもんだ」と、すたゝ歩

き出す。

「もつと緩り歩かねえか」

「さうか、これぢやア早いか」と又晒ふ。

自分は氣の軽いこと此上の無い者になつた。

「思ひの外に面白いもんだつてやアがる」と、憎さげに自分の口真似をする奴もあるが、先づ、親分始め多數の者は、自分を與し易からざる人間且つ面白い人間として容れたやうな様子である。

斯くて晝飯の時刻となれば、焚火の傍に寄り集まつて、大きな飯櫃と大井に山盛の菜漬とを圍み、各自茶碗に手盛をしては、立ち乍ら食ふのである。慣れない労働に、草臥れるよりは腹が減ること早く、其飯と菜漬との旨いこと、よく食へること、生れてからまだこんなことを覺えない。

晝過は少し身體が痛いけれども、昇ぐと降すとの呼吸が呑込まれたので仕事は幾分か楽になり、兎に角一日を無事に了へて、これから土方の部屋へ歸ると云ふ段になつた。

「おい、貴様の名は何と云ふ？」
親分に訊ねられて、自分はふと芝居氣を出し。

「捨太郎と云ひます」と、世を忍ぶ假の名を即座に案じ出した、世を棄てたと云ふ意味でも、世に棄てられたと云ふ意味でも、又

捨鉢になつたと云ふ意味でも無く、捨身になつて世を渡ると云ふ心を名に寓したのである。

「む、捨太郎か、貴様それを背負つて歸れ」と、頭で指示された物を何かと見れば、晝飯の食ひ殻、食櫃に井に茶碗に箸を汚い大風呂敷に包んだのである。

畏まつて早速命の儘にする、これは新米の奴の役目と思はれる。合棒で春を昇いだ奴、其他三人は、此邊の百姓の日當で雇はれて居るのださうで、親分其他に明日を約して、各自の家路へと歸つて行く、して見ると、彼奴は生粹の土方でないから、新米の我輩に痰阿を切らして黙つて居たので、若し相手が親分の盃を貰つた者なら、自分は撲られるのであつたかも知れない、撲られて撲り返したら、寄つて集つて袋叩きにされたのかも知れない、あと

は生粹の土方ばかりに、斯く申す見習ひ一個、夕焼の空を後に、黒の地に紫の隈を取つた林の中を、遙の一つ家に燃える火の光目當に急ぐのである。

「おい満洲、唄はねえか」と、親分よりも年を取つた分別顔の男が云ふと、シャブルを五本一束にして肩に掛けた背の高い男が、「今鳴る喇叭は八時半、あれに後れよや重營倉、今度の日曜が無いちやなし、離せ軍刀に錆が着く」と、朗らかな徹る聲で節面白く唄ひ出した。

態度風采、確に此奴は兵士上りである。

「捨太郎、貴様も唄へ」と親分。

言語の下から

「土方殺すにや及物は要らぬ、雨の十日も降れば可い」と、自分

は唄ふ。

「こん畜生」

「はッはッはッは」

快く晒つて晒ひ止んだ後、端無く自分は眞の我に歸つた、今日一日労働に追掛けられて、我と我を忘れて居たのである、

ふと、木立の隙間から東京の空を眺めやれば、宿り後れた雁一羽、聲のみを聞かして通る。

一つ家に着くと何れも草鞋を脱いで、裏手の小流で足を洗ふ、冷たさは頭の心迄徹るのである。

家には、色の青白い酌婦上りらしい嫁々と、飯炊婆々々が居る、遠くから見えた光は、大圍爐裡の焚火である。

「御免下さい、宜しく御頼み申します」と親分の嫁々に挨拶する。

「あゝ、今日来た人かえ、大變町噂ちやアないか、今迄何をしてたのかえ」と、恐ろしく權の高いものである。

「今迄詰らないことばかりしたんですから、今度は一つ眞面目になつて働かうと思ふんです」

「ほゝ、面白い事を云ふ人、眞面目になつて土方をしやうツて者があるだらうか」

すると、喇叭節を唄つた背高が

「姉御、土方程眞面目な者があるもんですか、人間どうもかうも仕様が無くなつて、愈々土方にでもなつて飯を食はうと、覺悟した時程、眞面目な事アありませんよ」と混せツ返す。

傍で聞いて居た親分は、例の苦笑ひに少し甘味を加へて

「大市が又皮肉を云やアがる。此捨太郎ツて云ふのはな、榮耀榮

華を仕飽きて、洒落に土方をして見る氣になつたんだとさ、何にしる面白い男だ」と、娼女に向つて機嫌よく説明するのである。

「そんな柔かい手をして、酔興に止せばいゝ、言語は素氣無いが、面に氣の毒の色がある。

一同に打雑つて、大きな白木造の食臺を圍み、飯に取掛る、副食物は鱈の煮びたしに大根と菜ツ葉との香の物で、すべて分量が多い、いくらでも食ひ放題である、中には御仕着せの一銚子に舌鼓を打つて

「此人は、見掛けに似合はねえ怖い人だせ、泥棒もやつたし、人殺しもしたんだとさ」と、自分にからかひ掛る奴もある。

「泥棒ツて豆泥棒の事で、人殺しツて女殺しの事よ、此奴惚話を正直に聞いてやアがる」と、警句を吐くは、親分よりも年を取つ

た例の分別顔の男である。

「女殺しッて云ふ面ぢやアねえや、御仕着せの一銚子は、やゝ新米野郎の受けがいのを猜む様子。」

「尤も、女殺しなんかは僕の柄に無いこつた、犬殺しか豚殺しが身分相應、豚殺しだ、自ら罵つて自ら首肯く自分。」

「眞誠に面白い人、親分と二人で別に離れて飲んで居る姉御が、酌をしながら微笑んで云ふ。」

自分は親分の受けがいのみならず、親分よりも寧ろ姉御の受けがいのやうである、これでは、事實上豚殺しより女殺しの方に近いかも知らぬ。

姉御は自分と同じ位の年格恰である。

さうして居る中に、ひよつこり入つて来た若者がある、矢張士

方體で、きりゝとした旅姿をして居るが、叮嚀に案内を乞ふと、かの年を取つた分別顔が、態々履物を突掛けて土間に降り、双方米搗ばつたのやうに、御辭宜の仕競べをしてべら／＼べら／＼油紙へ火の附いたやうに長つたらしい口上を述べ合ふのである。

成程、これが話に聞く土方の挨拶と云ふものであらう、何を云つて居るやら、素人の耳には薩張り判らないが、いづれ「御控えなせえやし」とか、「何とかの身内の何とか云ふのであらう、鹽を打込んだ酒で駆出し者で御座えやす」とか云ふのであらう、鹽を打込んだ酒で親分子分の盃を濟まし、一人前の土方になつた上は、此切口上の挨拶で、日本國中を食つて廻られるさうである。

挨拶が濟むと、若者は「客人々々」と敬はれて上り込み、早速酒肴よと款待される、けれども、親分は一人威張つたもので、

「あゝ、貴様は何次郎の身内かえ」と言葉を掛けて遣つたさうである。

挨拶に出た分、顔は、棒頭と云つて、親分に代つて若い者を統御する役目の者であるさうだ。

自分は一寸面白く思つて、どうせ此社會へ身を投じた上は、土方の交際を覚え込む迄にして置く方が好からうと

「親分、私を貴下の子分にして下さい」と頼み込む。

「君、眞誠に土方になる氣かえ」と、親分は驚き顔、初は「貴様と呼んだのが、今度は「君」になつた。

「えゝ」自分は猶豫無く首肯く。

「それならそれでいゝが、ちと辛抱して見せて呉れなければ、來て直ぐと云ふ譯にやア行かねえ」、親分は又最初に返つた苦笑ひを

見せる。

扱て、土方の仲間に入つての翌る日は、昨日に優る快晴で、寒氣も一入身を引締めるのである。

午前は、昨日の所で昨日の仕事をしたが、草臥れた頃に親分の命が下つて、部屋へ晝飯を取りに行かせられた、これが、まだ勞働に慣れない自分に取つて、適宜な骨休めの散歩になるのである。

晝近くなるると寒氣が緩んで、林の中の路に、入交つて描かるゝ枯木の影も、線が柔かくなつて見える、何と無く長閑な心地である、飯櫃に茶碗に箸の風呂敷包を背負ひ、香の物の大井をば手に提げ、緩々と、仕事場へ取返す途中、日當りのいゝ土手に、まだ紫の皮を脱がぬ露の臺を見付け、盗るゝばかりの俳的詩味を感じたので、暫し我を忘れて恍然と佇んだが、己れに返つて見ると、

香氣にこんな趣味に耽つて居られる今の身の上ではないから、三つばかり臺の臺を採つて、残り惜く此所を立去つた。

昨日と同じ野天の晝飯に、露の臺を撈つて香の物に雜せて食ひつゝ、人知らぬ趣味を楽しむ自分を、親分を始め一同が餘程の變人と笑ふ。

飯が濟んで、これから又仕事に取り掛らうとするに臨み、又もや親分の命が自分に下つた、今度は、一里ばかり隔たつた他の土方の仕事場へ使ひに行けと云ふのである。

何でも、新米の者が走り使ひに追廻される習しと思はれるが、單調の勞働に疲れるよりは、此方が却つて自分に都合がよいのである。

欣然と了承して、これを持って行けと渡された手紙を懐に、仕事

場を立去る、土方の親分などに手紙の書ける奴は滅多に無い、帳附と云ふ役の男が腰巾着になつて居て、すべての筆の用を辨するのである。

急いで行けと云はれて、歩くのは此方の得意と、驅足で大道を北に向ひ、半時餘りで目的の地に着いて、先方に手紙を渡すと、其方の親分は、馬のやうに長い赤面の好人物らしい男で、これは帳附の手を借らすに、自身で手帳の端へ鉛筆で書き、それを破り取つて封筒へ入れ、表書も矢張鉛筆で、封じ目に嚴めしく實印を押して出すのである。

歸りも矢張り急ぎ足の積りであるが、全く風が凩いで、打煙るやうな冬木立の上に抜く雪の山の、日向が黄がよつて日蔭が紫を合む色合をば、繪心に眺め遣つゝ、幾度と無く我を忘れて立停つ

ては、氣が附いて慌て、駈出すと云ふ次第で、思ひの外に時を移した。

あゝ、此風景に對する自分の感想を筆にせずには置かれるものかと、尋常の旅行の積りで、ノートを取出すべく懐を探ると、手に觸れて目を撃つものは、土方から土方への手紙の鐵釘流の表書である。

感興忽ち去つて、急に背中が寒くなる、一時に我が零落を覺えて、今迄の勢ひも抜け、とぼくと歩き出すと

「いゝ御天氣ですな」と、狎々しく聲を掛けて、突と後から押並ぶ者がある。

見れば、赤毛布を外套に代へて、西洋手拭をすつとこ冠りにした打份の、顔は南瓜のやうに赤黒く凸凹して、目は二粒の胡麻を

點じたかとはかりに、人間より餘程鈍い動物が人間に化けたのかと怪まれる男である。

「お前さん、何商賣をして居なさるです」
にや／＼笑ひ乍ら斯う訊ねられて、自分は失敬な奴だと癩癩を起した。

「何の用があつて、お前さんはそれを聞くんだ」と、忌々しさに其男を眺む。

「土方の手傳えをして居なさるでねえけえ」

「それを聞いて何にするつて、此方が聞いてるんぢやアないか」

「樂で金儲になるいゝ仕事があるだが、する氣はねえけえ」

此に至つて、自分は始めて何の爲に此男が自分に狎々しくするかを解し得た、同時に、素氣無い挨拶をしたのが氣の毒になつた、

さればとて、急に手の裏を返したやうに變るも輕薄らしいからと
「僕は酔興で土方の仲間に入つてゐるんだ」と、明瞭しない調子で
申譯じみた事を云ふ。

「さうだらうけど、土方より餘つ程いゝ仕事があるだアよ」、男は
根好くにやゝ顔を續けて居る。

どうせ、無錢旅行の爲に無錢旅行をする外に目的の無い今の身
である、何時迄も一つの事に滞つて居るよりは、誘ふ水に任せて
何所迄も流れた方がいゝのである、何も、眞誠の土方になつて仕
舞はなければならぬと云ふ事もないし、土方の盃を貰ふ迄今の所
に落着いて居なければならぬ譯でもない、即座に思ひ定めて、
「其仕事は何だね」と訊ねる。

「鑛山で稼ぐだアよ」

「ふむ鑛山」と考へる。

鑛山とは變つた話である、鑛山で稼ぐと云へば、無論坑の中へ
入つての仕事であらう、土方なんどちがつて、全然別世界の生
活が味はれるのであるから、これは一つ新しい經驗が得られて面
白い、むゝ、遣つて見やう。

「お前さんが連れてつて下さるのかね」

「さうさ」

「ぢやア、土方の親分へ断つて行かう」

「飛んでもねえ、そんな事を断る奴があるもんか」

「何故」

「そんな事を断つたら、お前も俺も獲叩きの目に合ふだア」

にやゝ笑つてばかり居る中は年寄じみて見えたが、眞面目に

なつて目を圓くする所を見れば、まだ四十にならない男である。

成程、土方は亂暴なものである、何事も無くつて唯だ此方の氣が變つた爲に暇乞ひをするのなら、快く肯入れて草鞋錢ぐらゐ出して呉れるだらうが、誘はれて鑛山へ行くと云つたら、或は因業に出て手荒い事をするかも知れないと會得した自分

は「ちやア、これから直ぐに連れてつて下さるか」と乗り出した。

「む、連れてくべえ、見附かると面倒だから、此毛布を頭から冠るがよい」

男は着て居る表皮を脱ぎ、二つに折つて通した紐を抜き取り、毛布だけを自分に渡した、愈々赤毛布の厄介になるのである。

「有難う」

一枚に擴げて、脚のある達摩のやうに全身を包み、眼球ばかり

を黒く残して、あとは隙間も無く眞赤に装ふ、暖かでいゝ氣持である。

「さア行かう」との段になつて、自分は「呀」と思はず叫んだ。

「どうしただア」と男も肝を潰す。

「使の返事を届けなければならぬ、此所に手紙がある」

「構ふもんか、打棄つて仕舞へ」

「そんな無法な事は出来やアしない、はてどうしたものだらう」

「そんならいゝ事がある、枯枝を拾つてる子供へ、錢イヤつて届けさせへえよ」

其六 坑夫となる

怪しき男に連れられ、赤毛布を引被つて、土方の銀月が金掘の

銀月と變るべく足尾を指して赴くのである。

其夜は鹿沼の木賃宿に泊つて、翌る朝早く立出でた、昨日は姿を匿す爲に借りた赤毛布を、今日は寒さを凌ぐ爲に又借りる、古峰ヶ原を経て、雪の山に登つて行くからである。

山を降りると、薬研の底のやうな谷際をば、鑛毒を流すことを以て有名な渡良瀬川の上流が、石を轉ばして疾く駛るのに出會す、其對岸から、青黒く骨立つた地肌を露はして、彌が上に重なり合ふ兇惡の岩塊は、これぞ、寶を出だし又毒を出だす足尾の銅山である。

彫り穿つたやうな深い谷が、濃い藍鼠の夕靄を充たして、足尾の町を其底の底に埋めて居る、此夕靄の裡に入つて、薄い幕を隔て、物を見るやうに上の方に目を放せば、銅山の一角に残る夕日

の色は錆た銅の色を呈して居る、應て、此別天地だけの電燈が、所々に華々しい紫光を放ち始めると、夕靄が之をばかし、一つ宛周圍に圓い虹を描く、それが目に暖い感じを與へつゝも、身體を冷たく刺戟する、町にはまだ雪が無くつて、白いは電燈の光の消え込むあたりの靄の色である。

「そら、それが、達摩宿だ、其方にも彼方にもある、お前もみつちり稼いで、早く達摩でも買ふやうになるがいよよ」

怪しの男は、軒に燈火のある怪しの家々を指しては、其所に隠見出沒する怪しの女を見よと云ふ、けれども、彼等が手のある白い達摩なら、此方も脚のある赤い達摩であるから、此際左迄怪しむに足らないのである、但し、彼等の中には面壁九年の行を了へた大悟徹底のしたゝが者もあらうと云ふのに、此方はまだ悟りの

小口も開けずに迷つて居るのが耻かしい。
町を通り過ぎて釣橋を渡ると、其所は、今迄と色も臭も異なる一
區域で、大きな建物が電燈の蔭に物凄く立並び、何やら知らず頭
を痛くするやうな重く強い震動がある、それも皆鐵の底に埋もれ
て居るのである。

世界がまるつきりちがつて、宇都宮で土方の仲間へ入つた時な
どとは異り、目に見えぬ強く大きな手に頭から押へ着けられるや
うな氣がし、此所へ來ると、銀月も一向に振はず、只管自分の見
すばらしい一人ぼつちなるを覺えるのである。

夢心地に、怪しの男の行く通りに行くと、今度は、眞暗な所に
眞黒な建物の、犇々と迫り合ふ間に入つた、其中一軒の戸口をが
らりと引けば、火と人とを詰め込んだ箱に息抜穴を開けたやうに、

暖い氣、明るい色、騒しい音が、繩のやうに振れて迸り出る。

怪しの男が突と入つて、何か簡單に交渉すると、早速

「おい、此方へ入んな」と、内に居る蛇のやうな目の奴に自分は
呼び込まれた。

圍爐裡に燃える赤い火と、其周圍にうよくして居る幽霊然た
る青い男共とを對照しての異觀に、我を忘れて一時茫然として居
る中に、横から手が出て、自分の身體を包む赤毛布を剝取つた、
此に至つて、達摩に脚のある化物が人間の正體を現はした。

重ねくの不意打に面喰つて居ると

「草鞋を脱いで上んな」と、蛇のやうな目の奴が又言語を掛ける。

氣が附いて見れば、自分を連れて來た怪しの男はモウ居ない。

上ると飯を食へと云はれ、飯を食つて了ふと、朝が早いから寢

ろと云はれる、柱に掛けた片照しの洋燈の弱い明りが、河岸へ着いた鮪のやうに並んで居る動物の群を仄かに照すを力に、隙間へ藻操り込んで左右の掛蒲團の端を引張る、此食ふと寝るとは、土方部屋と大同小異であるから、彼方の一夜の経験が助けになつて、左迄まごつかずに済んだのである。

「やア、君も此地獄へ落込んだのかえ、可哀相に」と、此方と腦天を合はして居る向側の鮪の群から聲が掛つた。

「はゝゝ」と、自分は左右の鮪に遠慮して低く笑ふ。

それつきり向側の鮪は此方を相手にせず、溜息を長く吐いて獨語を始める。

「今月來月再來月と其翌くる月、其又翌る月になつて櫻の花が開いたら、閻魔大王糞ウ喰へだ」

何時しかぐつすり寢込んだと覺しく

「昨夜來たの、おい起きねえか」と揺られて、悔り飛び起きる

夜はまだ明けないが、もう翌る朝の範圍である。

「お前の名は、蛇のやうな目の奴が、存外穩當の訊ね方をする。

捨太郎は一日でも土方をした時の名、今は別の世界へ來たので

あるから、随つて名前も新しくしやうと、又もや即座の案じ出し

「半四郎です」と答へた。

「半四郎なんて、柄にねえ名を持つてやアがる」と冷かす者があ

る。
「何が柄に無いことがあるもんか、俺の名の半四郎は、名高い女形の半四郎ぢやアなくつて、半分死んでるから半死郎だえ」と、青年客氣の其時の銀月は、忽ち怵えずして錐の末を露はす。

此と崩れるやうな大笑ひ、此騒ぎに、まだ寢惚けて居る奴儂も皆起き上がる、此所へ來ても銀月は銀月である。

飯を食つて居る中に、夜の番の者がどやくと引上げて來る。

「おい庄造、今日から國五郎を外へ廻はすから、半四郎をお前の組に入れるんだせ」と、蛇のやうな目の奴が云ふと

「ぢやア來ねえ」と、ふやけたやうな聲が聞こえた。

見れば、青く膨れた氣の重さうな男で、半分鎔けたやうな赤い目をし、夜着の袖口のやうな唇をもぐもぐさして居る、着物は、垢だか泥だかに光る得體の知れない腰切の筒袖綿入で、ほろ／＼の股引を穿いた姿、何だか頼ん坊の崩れ掛かつた奴のやうにも見えるのである。

此庄造と自分と、外に達公と呼ばれる十四五の小僧とが一組で、

曲物に飯と鯛の目差とを詰めた辨當を腰に付け、各々の名を記した札をば、頭役に庄造が持ち、「扱て出掛けやう」と云ふ段になると、菜種油のかんてらと新しい草鞋とが渡される、此かんてらには、上が輪になつて居る釣金があつて、それを拇指に嵌め込んで提げるのである。

此方から改めて聞きはしないが、すべてかう云ふ部屋をば飯場と云ひ、こゝに居る有象無象は、鑛山の坑に入つて金掘の下働をする最下等の勞働者で、一般に掘子と呼ばれ、萬事を指圖する蛇のやうな目の男は此飯場の主とは、自然に人々の談話と素振とに依つて判つた。

けれども、判つた事はこんな枝葉だけで、根本はどんな仕組になつて居るか、目も及ばなければ手も届かない、小口から當り次

第に呑込んで行くより外はないのである。

何時か知らぬが、戸外はまだ眞暗である、星は空から眞直に突向けられた鎗の穂先のやうに鋭く、こんな所にも鶏が飼はれて居ると覺しく、岩山を揺り崩さんばかりの悲壯な東天紅が歌はれる、けれども、我々は其東天の紅を見るに及ばずして、永劫の黒闇なる穴の底へ入るのである。

懸て、絶大の怪物が人を呑まうと構へて居るやうな鑛坑の口である、出るかんでらに入るかんでら、其狐火の亂れるが如き火光明滅の間から搖ぎ出る身の毛も慄立つ毒々たる物凄じ響は、坑の中に敷かれた軌道の上を人に推されて走る車で、其他、石に食ひ込む鑿の齒軋り、岩を蹴破るダイナマイトの叫び、人の足音、其話し聲唄ひ聲、すべて無数の枝葉に分れた坑の中の道に起る所の

物の響が、數十町の奥から重り重つて複雑から混沌に入つた一大震動に化し、此口に集まつて來るので、行んで傾くる耳に、地獄の門に臨むやうな感じを與へるのである。

坑の口に設けられてある番所に札を出して東吉飯場の庄造、半四郎、達治三人が、何番坑とかの何とかの場所を受持つと帳面に附けられて、今度は愈々冥途の路である。

二人の者は慣れて居るから、幾曲りと無く曲つて、奥へくと進み入るに、足の疾いこと驅るやうであるが、此方は左様行きやアしない、かんでらの灯に目がちらついて、前方から來る奴を岩とまちがへて手搜りしては刃突を食はせられ、岩に突當つてはこれは粗相をしましたと謝る、さればとてかんでら提げた手を後へやつては、一足も歩かれたもんぢやアない、それに指を釣金の輪

に通してかんでらを提げた具合がどうも面白くない、思ふ通りの向にはならず、やゝともすれば火先に手を烘られて脂が出るのである。

斯くて爪先下りの路を、何所迄も深々と進み入れば、坑は次第に窄まつて、頭が支へはしまいかと氣支はれるやうになる、これが行止まりらしい。

所が、それは行止まりでなくつて、狭い所を通り抜けると、坑が俄に廣くなる、さうして、此廣い所こそ眞誠の行止まりで、之を平面に畫けば、線の一端に圓が附いて居るやうなのである。頭立つた庄造の、物をも云はず打倒れて、死人のやうに長くなつたのが、事の始まりである、始めての自分には何をするのか仕事の見當が更に附かない。

是非無く、そこにある石の上に腰を下して、ぼかんとして居ると、一種の濕つぽく厭な臭ひが鼻を撲つて来て、霧のやうな水分が目の前に立舞ふ、後の岩角に掛けた三個のかんでらを壓して、此夜よりも一層濃い暗黒が、押固まるばかりに陰森として居る、此人間界に遠ざかつた坑の奥の又奥は、夜も晝も無く不斷の暗黒ではあるが、思ひなしか、夜の青みを含んだ暗黒とはちがつて、代りに赤みが含まれて居るやうである、随つて、目にも腦にも毒であるやうに思はれる、たゞ、坑の中の暖かいのが儲け物である。達公迄が、地面に胡座を掻いて坐睡をし始める。他世界のであるやうな物音が、潜に坑の周壁を這つて来て、耳くよりも低い調子で、叫ぶやうな強い氣勢を傳へる、時々、遠い所で大砲を打出したやうな響と共に、近く地震のやうな揺の起る

は、數間か十數間かの厚さある石壁を隔てた坑道でダイナマイトの破裂したのであらう。

自分は、何と無く不安で堪らなくなり、かんでらの明りに隙かして庄造を凝と睇めた、すると、其青く膨れた顔の目を瞑つたのが、死人のやうではなくなつて、全くの死人になつて見えるのである、達公は如何にと振向き見ると、今迄胡坐の儘に坐睡の少年がこれも何時しか打倒れて、此方に背中を向けて居る。

ふと、此二人がこれぎりに死んで仕舞つたらどうだらうと思ふと、襟元から水を注ぎ込まれたやうになり、慄と首を縮めて身震ひした、坑の口から五町來たか十町來たか、一向無我夢中であるが、路は幾筋にも分れて居るから、始めて入つた者には、一人で元來た通りを歸られるかどうか判りやアしない、萬一廢坑の中へ

でも迷ひ込んで、再び出られなくなつたらどうであらう、此世からなる地獄の底に餓死の屍を横たへて、それぎり人に知られずに仕舞つたらどうであらう、半四郎など、今朝出鱈目の名を云つて置いただけで、もとよ國所を知らした譯ではないから、後で腐つた死骸を発見されたつて、誰が伊藤銀月のなれの果だと見定めやう、半死と云ふに通はして半四郎と名乗つたのも、應て全死郎となる前表であつたかも知れぬ、あゝ、自分は何故輕卒にこんな所へ來たのであらうと、怪しの男に誘はれて、實地の事を問ひ究めもせずにおいそれと應じた昨日の酔興を悔む心になつた。

折柄、此方に近づく人の足音が聞こえる。

「やア、掘子共」と聲を掛けて、此別區域に入つて來るは、矢張かんでらを手にした二人の男である。

何れも、元氣のいゝ若者で、紺の筒袖の腰切の綿入に紺の股引、腰には藁で編んだ藁形の吠を下げ、同じく藁で編んだ鏡の草摺に圓みを持たしたやうな物を尻に當てゝ居る、飯場にうよくして居る有象無象とは、一段上つた別種類の者に見えるのである。自分が何と挨拶していか判らずきよろしくして居る中に、達公が目覺まして

「大工さん達御早う」と飛び起きて呉れたので、蹴が悪くなく次の鏢に移ることが出来た。

是等の物音に、庄造ものろくと起き上がった、それでも抜かぬ顔で、

「大工さん、今日は御早うがすな」とやるのである。

「何でえ、寝惚けて極りが悪いもんだから、胡麻化しに御世辭を

云つてやアがる」と、一人の男が罵ると

「早く梯子を下さないか」と他の一人は焦れる。

庄造は鎔けたやうな目を横に使つて、恨めしさうに自分を睨み「起きてる癖に、梯子ぐれえ下して呉れたつて、罰も當るめえ」

と、例の夜具の袖口のやうな唇をもぐぐ、咽喉の奥で小言を云ひ乍ら、横にして傍に寄せ掛けてある梯子を持ち上げ、其端を下向にして繰り出すと、するくと地面がそれを吸ひ込むのである。肝を潰して熱く見れば、其所には徑一間ばかりの穴があつて、

梯子は其中へ掛け下されたのである。

梯子があるとも、穴があるとも、一向氣が附かず、此所へ来て何をするのが仕事であらうと訝つてばかり居た自分を、氣を利かして梯子を下さないのが不都合であると云つて答めるとは、世に

此上の無理があらうか、いくら地の底の別世界だからとて、無理が道理で通る譯はあるまいと、始からいけ好かない野郎だと思つた庄造を、今度は癪に障る野郎だと思ふやうになつた。

けれども、今来た二人の男が、梯子傳ひに穴の中へ入つて行くに好奇心を呼ばれて、一方の憤るべきことをも打忘れ、危い縁に立つて覗き下すと、穴の深さは一丈ばかりあつて、口は巾着を括つたやうに狭いけれども、底へ行くと十倍も擴がつて居る、二人の男は早や梯子を離れて、腰の吠から取り出した鎚と鑿とで、かちり／＼鑛脈を掘り始める様子である。

二人は金掘で「大工さん」とは其下働きをする掘子からの敬稱である、此に至つて合點が參つた。

此大工さんなる者の掘子に對して睨みが利くこと、將校と兵士

とに於けるそれを思はしめるのである。

さうして居る中に、二人の大工さんは急いで梯子を昇つて来た。「それ」と云ふと、庄造と達公と二人がよりで、慌て腐つて梯子を引き上げる。

それが終ると、かんでらを取るより早く、先刻入つて来た路と筋違に開いて居る路へ逃出す。

何が何やら薩張り見當が附かないけれどもいづれ生命にかゝるべき一大異變が起つたにちがひないと、様子の判らないだけ餘計に氣が顛倒して、かんでらを置きツ放しに逃げ出しかけて氣が付き、慌てゝ取りに戻ると

「危い、早く來ないか」と呼ぶ聲がする。

所が、危いと呼ばれて狼狽が更に甚しくなり、かんでらは取つ

たが火を消して仕舞つたので、思はず

「呀」と叫びさま、微に見える人々のかんてら明りを便りに駆け出して、一足路の部分で踏んだ途端、上から雷が落ちたか下から火が噴き出されたか、形容の出来ない激しい音響と震動との中に身が捲込まれたと思ふと、ばらばら、背中へ小石のやうな物が降つて来る。

今度は叫ぶ聲さへ出ないで、生死の境さへ知らずに、人々の佇む所迄駆け着く。

何てえ面であ、怪我をしたのか」と問はれて、自分は答へる言語を知らない。

怪我をしたかしないか、自分でもまだ判らないからである、或は、生命にかゝはる重傷を負うて居るかも知れないのである。

やうく、気が沈着くと、一時血の環りも止つたかとはかりに剛張つた身体が、だん／＼緩み渡つて來、始めて別條の無いことが判つて、吻と安心の溜息を吐いた。

聞けば、鐵脈を追うて岩石を割り開くべく、ダイナマイトを掛けたのださうである、かうして出來た鐵石の屑を穴の中に溜めて置かずに、轆轤仕掛で捲上げるのが、此場に於ての三人の掘子の仕事で、これが幾度と無く繰返されるのである。

引返して見ると、人間の頭より大きい石の欠片が五つ六つ穴の縁迄飛び上つて居る。

「まご／＼して之に打たれると生命が無かつたのだ」と肝を冷す。晝夜の境も判らぬ長き暗黒の地の底に、轆轤仕掛の繩を手繰ると、梯子を引上げてダイナマイトの破裂を避けるとの、二つの事

を間断無く繰返して居たが、掘子とはちがつて、金掘の方は懐中時計を持って居るので、晝飯の號令が下から掛る、犬の如く飯を食ふ、食ひ了つて少し休むと、又其單調で危険で痛苦な労働に取掛らせられる。

所謂大工さん達は、時計に依つて交代の時間の来たことを知つたらしく、聽て仕事を仕舞つて、礮石に膨らました吠を帯びつゝ梯子を昇り、「掘子共御苦勞」と棄臺詞をしてさつさと引上げるのである。

これで我々の仕事も濟んだらうと、張つて痛みを覺える腕の筋を揉み柔げたが、肝腎の庄造に歸り仕度をする様子がないので、半分失望して

「庄さん、もつと仕事をするのかえ」と問けば

「交代の大工さんが來ねえ中は、歸られやアしねえんだよ」と佛頂面。

「直に來るのかえ」

「却々直に來やアしねえ」

「さうかね」

これで、二人の會話は味も無く了つた。

其後の物靜さ、唯だ三人の呼吸をする音が聞こえるだけである。自分は、急に堪らない程、此地獄の底を脱け出て人間界へ戻りたくなつた、心は矢と逸り火と燃える、立つて居る足の拇指が、じり／＼と地に食ひ込む。

けれども、庄造は不相變要領を得ない面をして、空噓いて居るばかりで、齒答へもなければ突掛り甲斐も無い、其中にとたりと

尻餅を搗いて、又もや坐睡りをし始めるのである。

達公は頻りに「法界節」を唄つて居たが、段々末が臆になつて、これもうとう／＼坐睡りと消えた。

自分も、立つてばかり居たところで仕様が無いから、是非無く尻餅組の中へ入つて、庄造を右に達公を左に膝を抱えると、何時しか夢に入つたらしく、

「抜道を通つて歸るべえよ」と云ふ達公の聲に目が覺めた。

坑の底の空氣の色は、栗梅の地に五色の雲を散らしたやうにもや／＼して居る。

「歸るのかえ」と、自分は立ち上つた。

交代の大工さんの來ねえ中に歸るのが見附かると、酷え目に逢ふだアから、抜道を通つて歸るだアよ、お前も俺等と一緒に驅け

なきやアなんねえだ、はぐれると出られなくなるだアから、庄造とちがつて達公の云ふ事は要領を得て居る。

歸るのは嬉しいが、又一つ違つた危険を冒さなければならぬのである。

達公の言語の下から、庄造はのろ／＼歸り仕度を始める、口には出さないが、抜道を歸ることに同意したのである、自分も兎に角歸るのが嬉しいので、いそ／＼と辨當の空殻を腰に結はへ着け、草鞋の緒を締め直しなどする。

其間に、庄造と達公とは身仕度を了へて、此方に構はず、すん／＼歸り始める、のろ／＼して居ると侮つたのが不覺で、いくら／＼のろ／＼して見えても、物慣れて居るだけに爲る事が順序立つて、惣體の上からは、新米者が汗を流して急ぐよりも早くなるのである。

る。

「ま、待つて御呉れよ」

「早く来い、何をぐずぐずしてるんだ」と庄造の罵る聲は、早や此區域の外である。

「路は何方だえ」

「此方でえ、頓馬だなア」

最初入つて来た路ではなく、ダイナマイトの破裂する時に逃げ出す所のそれである。

狼狽へながら、聲の来る方の路へ飛び出して見ると、二つのか

んてらは十間餘り先にちらついて居る。路を挟んで、所々に怪げな物が見えるので、急ぎ足に歩きながら

人も氣を付けて見ると、それは、人間の排出物に全體隙間も無く

四五寸の白い毛のやうな微が生えたので、氣味の悪いこと云はん方無、いこんな事をするに充てられてあるに依つて見ても、此所は公然と人の通らない路だと云ふことが判る。

小股走りに進めば進む程、濛々と鼠色を籠めた水氣が濃くなつて、坑の周壁は汗を掻いたやうに濡れ渡り、歩くとびしやり／＼草鞋の裏が鳴つて、冷たくも暖くもない厭な感覺の濕氣が足に徹る、お負けに、少し下手な歩きやうをすると、する／＼と近づて、身體の中心を失ひさうになるのである。

けれども、それ等はまだ我慢が出来る、出来ないのは、一種じり／＼と身に浸み込むやうな濕つばい臭ひである、臭ひと云ふ程の著るしい臭ひでもない癖に、人を刺戟する力が頗る強いのである。

こんな所で二人の者にはぐれたら、一分一厘の猶豫も無く、直様生命問題に到着しなければならぬのであるから、漂ふ足を踏占め、目を睨き齒を食ひ占めて、一生懸命に庄造達公の後を追ふ。

「氣を附けねえ、此所から落ちて、身體が五つに碎けて死んだ者があるんだぜ」

庄造が、其のろくさ加減に似合はぬ引締つた聲を出したので自分には思はず怖りとした。

目の走る所、前面は幾十丈あるか、上の方が暗黒の中に消え込んで判らぬ絶壁で、それに幾挺と數の知れぬ梯子が、繼ぎ足され、真直に掛つて居るのである、更に適切に云へば、自分等の仕事場からだら／＼登りに引かれて居る路が、此に至つて頓挫し、

今度は壁に掘り下げられた坑を真直に昇るのである。

慄として一足下がる自分を其儘にして置いて、庄造も達公も平氣で昇り始める。

已むに已まれぬので、自分は両手に生命を込めて梯子の桁を確と握り占めた。

こゝを大事と昇り行くに、岩から滲出す水分に梯子の全體が濕らされて居る上に、矢張此手合のやうに抜路を通る奴があると覺しく、草鞋の裏の滑らかな泥が桁に塗られてあるので、手も足もぬる／＼と迂り、握つても踏んでも答へがない、それに今日一日の勞働に腕の筋が張て、握る手先に力が入らず、身體の重みを任せると、一生懸命に握り占めた桁が、する／＼と手の中から逃げさうになる、其度毎に、腋の下から冷汗がたら／＼と肋骨を傳つ

て流れるのが判るのである。

もう餘程昇つて、氣力が盡き果てさうになつたので、一寸息を休めながら仰ぎ瞻ると、二つのかんでらは七八間の上に明滅して居るが、それを持つて居る人間の身體は水氣に籠められて見えな

い。「まだ梯子が長いと見える」と呟やいた獨語、自分乍らこれは幽靈のやうな聲だと思つた。

上を見ると下も見なくなるのが人間の癖である、どれぐらゐ昇つたらうと、かんでらを目の上迄攀げて、瞥と見降したが、ぶる／＼と身を震はして直ぐに止した、真直に立ち續いて居る梯子は深々たる水氣の中に消え込んで、其下更に幾何の長さがあるか判らない。

天も地も共に混沌として果しなく、無極の上から無極の下迄通つて居る危い梯子の中段に、どうすると云ふ當ての無い身を託して居るやうである、足を踏み外したら身體が五つに碎けるだらうの七つに碎けるだらうのと云ふ虞れよりは、更に／＼深く遠い根本的恐怖に襲はれて、目も瞬み心も消えるばかりである。

それに、たゞでさへ邪魔になるかんでらが、此際動もすれば自分の生命を消さうとするのである、梯子の桁に當つては引くりかへりさうになり、自分の胸に觸れては潰れさうになる。

最後の活動、自分はまだ死んだ氣になつて無茶苦茶に昇り出したとばかり、其後の我を覺えがない。

『どうした』と呼ぶ激しい聲が耳に入つて、夢の覺めたやうに目を開けば、早や何時の間にか梯子を昇り切つて、一番上の桁に片

足を残したまふ、俯向に倒れて居るのである。

呼んだ者は達公であつた。

「あゝ、僕は死ななかつたか」

此所からは間も無く坑の口で、出て見ると全く日が暮れ果てゝ居る、夜の明けない中に坑へ入つて、日が暮れてから坑を出る、これでは日の目を見る時が無い。

「いくら難行苦行の旅だからつて、こんな地獄に長居が出来ると、もんか」と、二人の者に憚ちらず自分は叫んだ。

「へゝ、もう懲りたのか、庄造は傲然として冷笑する。

「折角来たんだから、まア三月辛抱しろよ、勘定が渡る迄さ、はゝ、それも考へ物かも知れねえな、飯場に搦ッ引かれると大概とんくになるんだから」と、歩き乍ら振返つて、自分の顔を覗き

く云ふ。

坑外はべら棒に寒く、空の低いこと、今迄仕事をして居た所の上のやうで、ちらく落ちて来るは大きな雪の片である。

「何が、あんな屁のやうな事に懲りるもんか、けれども、人間の爲すべき業ぢやアないから、我輩厭になつちまつたんだ、左様なら」

呆氣に取られる庄造と達公とを見向きもやらず、飄然として此活地獄を立去つた。

「可哀相だよ白歯で懐胎、聞けば亭主も無いとやら」

町の方では、震へ聲の鼻唄が聞こえる、達摩屋の素見速であらう。

雪がだんく細く繁くなる。

其七 死して甦りたる經驗

宇都宮の木賃宿で、魚賣の親仁に着物を遣つた代りに、今着て居る布子に添へて取つた五十錢、其後遣ふ機會が無かつたので、まだ三十錢ばかり残つて居る、これで此夜は足尾の木賃宿に泊つた。

翌る日からの銀月は、背て有の儘に自白す、全く體のいゝ乞食に落果てたのである。

田舎の大盡らしい家を見と、飛び込んで事情を訴へ、飯を食はして貰ふか金錢の合力を受けるかするのである、然る所、それには何かの口實がなければならぬ故、假りに故郷の秋田へ歸る爲に旅をする者と告げたのが、何時の間にか自然に實際の旅行の方針

と變じて、兎に角故郷を目當てに行く事に定めた、否、定めたのではなくつて定まつたのである、此に至つて、小西氏に對する面目を思ふの餘裕も亦無くなつた。

腹を減らし通しではあつたが、兎に角一夜の野宿もせず、五六日を経て福島迄辿り着いた。

福島で、又もや土方の仲間に入り、四日居る中、三日働いて一日は雪の爲に休み、したゝか飯を食つて元氣を附けたが、これも亦面白くも可笑しくもないから、今度は尋常に斷つて、親分から一圓の草鞋錢を恵まれたが、氣の緩んだ爲か、急に頭痛と腹痛とが一度に起つて來て堪らなくなつたので、土方部屋を立出でた後、木賃宿に三日逗留し、賣藥を服んだり、馬肉や豚肉を食つたりして保養に力めたら、四日目の朝には、以前の銀月になつて立出で

ることが出来るやうになつた。
萬歳の鼓の音に驚けば、何時の間にか早や年去り年來つて居るのである。

懐には、もう五六銭しか残らないけれども、東京を出てからの経験上、金が無ても旅行が出来ることを信じて居るから、例の通りの打份で、宇都宮や足尾に居た時よりは、時候も土地も更に一段寒くなつた事も苦にせず、路を急いで、福島を中心としての平原を突抜け岩代から羽前に越える山路へさし掛つた。

腹が減る迄は唯だ無茶苦茶に歩く、腹が減つては蒸芋を買つて食ふ、食つては又歩く、三十戸の村の次には廿戸の村、廿戸の村の次には、十戸の村、其又次になると五戸二戸と飛びくにあるばかりで、山が段々深くなつて来る、それも、家と家との距離が

段々遠くなつて、家の構へが段々見萎らしくなつて来るのである、初は、木立の中や山の懐の日は當らない所にぼつちりづゝ見いだされた雪の叢が、次第に擴がつて往來迄も盃食するやうになり果ては、青々と黒すんだ天を残して、滿地森々と白く鎧ふに至つた、けれども、それは木の枝に雪が降り積つたやうな美しい景色ではなく、雪は鑛物のやうに固まり切つて、餘りに白く輝き過ぎ、木は針金を折り曲げたやうに、餘りに黒く剛張過ぎ、目を刺戟することゝが度に過ぎて、却つて不快の感じを與へるのである。
雪は段々と厚くなり、五町三町の間、纔に一戸づゝ淋しく見出された人家も、全く絶え果てた頃、夕日は恰も旅人を嚇かすやうに光を收めて、面に碧の波を寄せつゝ、山の凹に半身を匿した、滿地の雪は鋼鐵の鎧を帯んだやうな色に變じ、之に對して、木立

は却つて打煙るやうに色薄くなつた。

斯くて、日は全く暮れた。自分は痛く餓る疲れ且つ凍えたけれども、宿借るべき家は無くて唯だ雪があるばかりである、食ふべき物は無くて唯だ雪があるばかりである、着るべき物は無くて唯だ雪があるばかりである。

去る程に、夕日の名残の朱鷺色も褪めると、唯だ一個の旅人の胸に包まれるその外、天地に生命と温熱と無く、見渡す限りの雪山雪野の上に、萬點の碧なる星紫なる星が燦き出した。

肌薄く、腹空しく、足重く、凍え、餓え、疲れた果の、たつた一人の旅人に對する爲としては、餘りに重々しく構へ過ぎた夜の神の武裝ではないか。

始めて通る山路を、何所迄行つたら宿場があるか、途中にどん

な用心すべき事があるかも知れぬ、唯だ無鐵砲に歩いて來たのであるが、此に至つて自分も眞誠に弱り果てた、凍えを感じる中はまだ眞誠に凍えたのでなく、餓えを知る中はまだ眞誠に餓えたのでなく、疲れを覚える中はまだ眞誠に疲れたのではない、凍えも餓えも疲れも判らなくなつて、ふらふらと宙に浮くやうに歩くに至つて、凍え餓る疲れが頂上に達したのである、足尾銅山の坑の中で梯子を昇つたそのやうな、時に臨んでの危険ではなく、じりじりと自然に詰まつた身の果であるから、問題が更に、重大である。

其中に、身體がびりびりと電氣を掛けられたやうに震へたと思へば、兩脚が木で造つた物のやうに剛張り、膝の關節が些も利なくなつた、仕様が無いから、膝を曲げずに、魔が差した死骸のや

うに足を運ぶ、其爲路の歩らないこと云はん方無い、果ては、剛
張りが腰から背中に及び、背中から肩に及んだ、頭に及んだら其
儘打倒れて往生するかも知れない、寧ろ往生するにちがひない、
自分は今頭一つで生きて居るのである。

それも、自分の歩みの虫のやうに鈍いことが自分に判る中は好
かつたのである、半時間ばかり掛つて纔に電信柱五本の間を歩き
過ぎたことが判る中は好かつたのである、夜も早や八時か九時頃
であらうと考へられる中は好かつたのである、果ては、何も蚊も
判らなくなつて、夢とも現とも無く歩いて居たが、微に自分の脚
が動かなくなつたとき意識した、次には矢張微かに、枯木を倒すや
うに自分の身體が横さまに飛んだと意識した、すると、痛みと云
ふ程でも冷さと云ふ程でもないけれども、唯だ身體が物に觸れた

とだけの感覚がした、實際は固まつた雪の上に強く横倒しになつ
たのである。

此、身體が物に觸れたとの感覚は、自分に朦朧と半分夢が覺め
たやうな心地を與へた、さうして、起るともなく身を起し掛けた
が、今度はしたゝかに尻餅を搗いて、其儘昏々と上半身が前に折
れ、膝と頭と接くやうになつた。

ざアつと、大きな竹箒で背中を掃かれたやうな感じがしたと思
へば身を置いた下が俄に底知れぬ眞暗な堅坑になり、我身は非常
の速度を以つて深々と何所迄も落ちて行くのである。それが、か
の梯子の掛つた鑿山の堅坑のやうにも思はれる、落ちてくゝ落ち
着く果は地獄で、自分は、今死んで行くのであるやうにも思はれる、
けれどもそれは、唯だ微かに意識されるだけであつて、悲しいと

も苦しいとも、困つたとも、弱つたとも、思はれない、これが死ぬのなら、死といふものはそんなに恐るべきものではない、却つて一種云ふに云はれぬ趣があるものである。

すると、忽然耳許に人聲が起つた、はてなと思つて聞き直すとそれが段々遠退いて

「おうい」と微に呼ぶ聲になる

呼ばれたのは自分であると思ふと、不思議にも自分は、其身が底知らずの坑の中途からふはくと浮き上るを覺えた、上り上つて上り盡くすと、又もやびりびりと電氣を掛けられたやうに身體が震へた。

悔りしたやうに我に返つて頭を擧げると、驚くべし、前面一町ばかりの所に一大異象がある。

實に一大異象である。

雪の外には何も無かるべき空原の上に、赤々と焔を吐いて火が燃えて居るのである。雪の上が直ちに火なのである、雪が焔を吐いて居るのである。

而もそれが、人里を遠く離れた土地である、人間の戶外へ出て居るべからざる時間である。

此火の色が眼を打つと共に、朦朧たる頭腦が瞭然となつた、よく視ると、距離は自分の居所から一町ばかりで、時々ちらちらと焔を遮る黒い物と、焔の彼方に明滅する赤い物とは、皆人である、そこで、火が自然に雪の上に燃えて居るのではなくつて、少なからぬ数の人間が、雪の上に火を焚いて居るものと判つた。

次には、それ等の人間共が、何か大聲に物を云ひ合つて居るの

で、其打雑つた響の末の一色になつて消えるのが、自分の耳へ自分
分を呼ぶ聲のやうに聞こえたものと判つた。

此聲の爲に自分は甦つたのである、此聲が無かつたら、底の知
れぬ穴の中へ落ちて行くやうな氣持と共に、だんく、死んで行つ
て、行止り迄行着いた時は即ち死切つた時であつたかも知れない
のである。

要するに、此所に雪の上に火を焚いて人が集まつて居て呉れた
御蔭で、死ぬべき銀月が不思議にも助かつたのである、いやまだ
助かつたとも助からないとも定まつた譯ではないが、兎に角これ
が爲に一度は息を吹き返したのである。

けれども、此人里離れた山中に、此雪の外何も無い所に、此極
寒の真夜中に、何の爲に少からぬ人間が集つて、火を焚いて騒い

で居るのであらう、實に是れ一大異象の上に一大不可思議ではな
いか、山賊強盜の群が、これから勢揃へをして、田舎の豪家へ押
入らうとするのか、百姓一揆が藩旗を懸へさうとするのか、博徒
或は土方が、邪魔の入らぬ所で生命の遣り取りをしやうとするの
か、いづれ非常の事であればならぬ、一大異象の一大不可思議
のと、傍で呑氣に見て居るべき事ではなくつて、或は自分の身が
一大危険に近づいて居るのかも知れない。

けれども、危険だとか危険でないとか、自分の頭腦は、まだそ
んな複雑な働きを判明にする程の常には復さないのである、唯だ
兎に角に自分はこの火の燃えて居る所迄行かなければならぬもの
と思つただけなのである、寧ろ、あの火に自分の身體が引寄せら
れるやうに思つただけなのである。

で、先づ立ち上がるべく試みたが、手足が剛張り返つて、伸すことも屈げることも出来ない、半分立ちかゝつては又ばかりと倒れる、けれども、固まつた雪へ身體を打着ける度毎に、だん／＼剛張が緩んで血が通ひ始めるやうに思はれる、果ては、ふらつき乍らも兎に角に脚で身體を支へることが出来るやうになつた。

火は益々赤く燃え、人聲は愈々騒がしくなる、空氣は凍り固まつて、そよとの風も動かさず、仰げば星は皆手に取られるやうに近く、雪の上に人の影を描く程に光が強い。

立つことは立つたが、少しでも脚を運ぶと、直ぐ又打倒れさうなので、暫くは單に足踏を繰返し、それからそろ／＼と迂るやうに進み始めた、其鈍いこと蟲の這ふやうである、心は火の傍へ飛んでも身體が伴はないので、引返しては又一足引張つて進めるの

である。

斯くて、一町ばかりの距離の所を、殆んど三十分も費してやう／＼に迂り着いたが、何の思ひも無く、唯だ火が戀しいばかりにふら／＼と焔に押冠さるやうに進み出た。

「危い！」

五人ばかりの聲で、一齊に驚きを含んだ激しい劔突を食はせられ、はつと氣が附いて一足下がり、踉蹌と倒れさうになつて辛くも踏止まつた。

「お前は何だ、何處から来た」

之に答へやうとしたが、唇も舌も微塵動かない、是非無く指を擧げて口を差した。

すると、それを見て突と前へ出た男がある。

「お前さん、腹を減したんだべえ」と、打放したやうな野良聲を頭から浴せ掛ければ、悔りして振仰向くと、それは雲突くやうな大男の老人である。

答へやうと思つても口が利かないので、唯だ首肯いて見せる。

「それア可哀相なこんだ、雪路に腹を減らしちやア遣り切れるもんぢやアねえ、あゝ、食ふ物があるといふだが、此山中で此夜中だから、仕様がねえなア」と老人が歎息するに

「此所にいゝ物がある」と、焔の彼方に叫ぶ聲がしたかと思へば焔を切つて飛んで来て自分の足許に落ちた物がある。

老人が直様拾ひ上げて、粉雪を拂き落し

「おゝ、これアいゝ物があつた」と、包んだ風呂敷を解いて自分に差出す。

見れば、能代塗の小判形した曲物である、百姓の持つ辨當にちがひない。

自分は今迄自分の餓えたことも忘れ果てゝ居たのである、餓えを忘れる程餓えが極度に達して居たのである、今此曲物を辨當と意識すると共に、急に餓えを覚えて来た、否、餓えが自分に迫つてそれを覚えさせたのである、そこで自分は夢心地に曲物の蓋を取つた、中は薄黒い飯の上に味噌を塗り附けたのである。

「あゝ、箸がねえな」と云ひさま、老人は其長い身體を前へ屈げて、焔の中へ手を突込むやうに見えたが、細い枯枝を抜き取つて前後を折り棄て、真中のいゝ所を更に二つに折つて出して呉れた。有難うと云はうとしたが、矢張り聲が出ない、是非無く唯だ頭を下げたゞけに止めて、出された箸をば、二本一纏めに凍えた

手に握り占め、二三歳の子供が爲るやうな不器用さ加減で、犬の如く曲物の中の飯を食ひ食ふ、味噌は唯だ鹽辛いばかりで旨み無く、それに粟、稗、麥、赤小豆等の多量を雜へた黒米の飯の、氷らぬばかり冷え切つたのであるから、何でも無い時なら逆も咽喉に送られた品ではない、けれども、其味を覺え始めた時は、丁度底を鳴らして食ひ盡した時であつた。

食ひ盡して後の氣持を何に譬へやう、氷に包まれて細り固まつた梅の枝が人知れず春の信に接して、油のやうに柔いだ色を帯び、見る／＼其蓄を膨らまして來た所の、それと頗る趣の似て居るを覺える、自分は恍然として、我身を一旦死んで更に清く高い者に生れ換つたものと思つた、實に今迄覺えない爽やかな氣持である、こんな氣持を味はふ爲めなら、今迄の苦しかつた事も、死地に陥

つた事も、九分九厘迄死んだ事も、背て自分の身の損失とするには足らぬと思つた、寧ろ幸ひであると思つた、前に紅蓮の焔があるをも忘れ、周圍に何者とも知れぬ多くの人間が居るをも忘れ、自分がどうして此所へ來て、何故此所に立つて居るかを、どうして自分が今飯を食つて、其飯が誰から出て、何故此所に持つて來られたかを、すべて問ふ心も怪む心も無くつて、唯だ此人間界を超越したやうな氣持を味はつて居ると

「どうでえ若えの、氣が附いたけえ」と、老人から心許無げに問ひ掛けられた。

問ひ掛けられて、それに答へなければならぬと思ふと、今度は咽喉から暖かい氣が雲の様に湧き出し、それが舌の先迄に及ぶと舌が柔かくなり、それが唇迄に及ぶと唇が柔かくなり、それが唇

を押開いて外へ出ると共に、自然に聲も出るやうになつた。

「有難う御座います、御蔭で助かりました」と、臙氣ながら、兎に角意味を人に通じ得るだけに舌が動いた。

舌が動き出したのは、一時人間を超脱したやうな氣持になつた自分を、再び人間に引き戻す動機であつた。

今迄、夢の中の物のやうに朦朧と意識された周囲の光景は、新に自分の頭脳に解釋されるやうになつて來た、此人々は何所の何者であらう、何故此極寒の眞夜半をも厭はず、人里離れた深山に集まつて、雪の上に火を焚いて居るのであらうと、訝かしく、怪しく、氣味悪く、恐ろしく今更のやうに眼を光らして周囲を見廻し直す。

すると、今迄氣の附かなかつた變つた物が目に觸れた、一通り

や二通りの變つた物ではなく、實に、臙を刺して冷りとさせる程の變つた物なのである。

焚火の彼方に、人々を少し離れて雪の上に横たはつて居る黒々とした物は、どう見ても、生物の死骸にちがひない、或はまだ死切つたのではないかも知らぬが、兎に角生物が己れを支へる力を失つて倒れたのにちがひない。

で、自分は我知らず髪の毛の根を引締めて、目立つ程ではないけれども、自分を保護する身構へになつた。

「何です、其所にある物は」と訊ねた調子は、自分乍ら氣味の悪い程沈で居る。

「あれけえ、あれアはア、馬が打倒れたのだアよ」、直接に相手になるのは、不相變背の高い老人ばかり。

「え、馬が倒れたんですつて、案外の事に、自分は念入れて問ひ直す。」

「む、馬が倒れたアよ」と、老人は同じ答へを繰返した上に、なほも其言葉に力を添ふべく、馬のやうに長い其顔を横にして見せる。

「へえ、どうして馬が倒れたんです、」自分は先づ此不思議を究めなければならぬ。

すると、老人は自分に答へるに先立ち、打仰向いて感歎の聲を天に放つた、黒ずんだ紺色の空は、よく見ると大きな洞穴のやうに奥深いけれども、稜角の鋭い紫の星碧の星は、皆地に落んとして近く輝いて居る、それが、感歎の聲を受けて、答へるやうに揺めくのである、老人が人々を抜いて首一つだけ高い身の丈、其舊

約的趣味を帯んだ風采、何と無く、これから天の黙示を聞かうとするのでともあるやうな感じを自分に興へた。

「お前さん、何故此馬が倒れたつて聞きなされるのけえ、それよりは、お前さんが何故今時此所へ來なすつたか、まアそれを聞かして貰ふべえ」

これは又案外の上の案外な訊ねである。

「ちやア、僕の事から先に申しませう、精しく御話すると長くなるから、ほんの荒筋だけにしますが、僕は東京から秋田迄錢を持たずに歸る者です、今朝福島を立つて、こんな山中のこんな雪の深い所を越えやうとは思はず、案内も知らない所を無茶苦茶に歩いて來た所、腹は減る、脚は草臥れる、身體は凍える、とうとう雪の上に倒れて、其儘往生しやうとしたんです、所が、何所かで

自分と呼ぶやうな聲がすると思つて、ふと目を開いて見ると、雪の上うへに火ひが燃もえてるんでせう、そこで、やうく立ち上あがつて、兎うに角かく其その燃もえる火ひを目め當あてに、此こ所こ迄まで來きて見みたんです、それから後あとは皆みなさんが御ご覽らんの通とほりの次し第だいで、全まく皆みなさんの御ご蔭かげで生な命いのちを拾ひろつたやうなものです。いや全まく御ご蔭かげで生な返かへつたんです、此こ御ご恩おんは決して忘わすれません」

自分じぶんは、感かん昂たうまつて震ふるへる聲こゑを引ひ締しめ引ひ締しめ、やうく述のべ

了しまつた。

「む、さうけえ、老人らうじんは確たと横よこ手を拍うつのである。

其その音ねは枯か木きを斧おのの脊せでたたくやうである。

「む、さうけえ、老人らうじんは又一またつ感かん歎たんの調ちやう子しを繰くり返かへしてから

「ちやア、何なに故ゆゑ馬うまが倒たふれたか話はなすべえ」と咳せき拂はらひを二につ三さんつし、

勿な體たいらしく態たい度どを改あらめた。

「わしの家うちは、あの火ひが見みえる所ところだが、あんまり此こ所こが騒さわしいから態たい々々降おりて來きて見みた」と枯か木きのやうな手てを舉あげて、遙はるかに高たかい峰たかねの肩かたを指ささす。

尖とがつて居ゐるかと思おもはれるばかりの指ゆびの先さきに、小ちひさい火ひがちらちらと揺ゆいで居ゐる。

斯かくて先まづ己おのれ自じ身んの出しゅつ所しよを明あきかにした老人らうじんは、徐おもろに進すすんで本ほん題だいに立た入いつた。

「來きて見みると馬うまが倒たふれて居ゐるちやアねえか、どうしたヤアつて聞きいて見みれた、重おもてえ雪ゆき車くるまを輓ひかして、物ものも碌ろくに食くはさずに、高たかえ山路やまみちを、尻しりの引ひつばたき詰づめで登のぼらしたよつて云いふだア、馬うまだつて虎とらだつて、そんねえに酷ひどく扱あはれてたまるけえ、とうく打う倒たふ

れて仕舞つて此でいたらくだ、そこで馬士の野郎が困りやアがつて、此所から三里ある己が村迄驅けて行つて、此通り大勢の有象無象を引張つて來、雪車を繼ぎ合はして、倒れた馬を乗つけやうとしてゐる、だが畜生の圖體が大げえもんだから、なか／＼旨く行かねえだ、明日の晩の今頃迄も掛つたら、隻脚ぐれえ乗つかるだんべえ、これも馬を酷く扱つた罰だと思やア、腹も立つめえ、いゝ罪亡しだ」

先づ馬を指しつゝ人を罵るのである。

「そんな事は、まアどうでもいゝが、お前さんと此倒れた馬と大變深え因縁があるだアよ、お前さんそんな服装イしてるだアけど言語を聞きやア、百姓や土方ぢやアねえやうだ」と思ひも掛けぬ見當へ話の筋が反れた。

「えッ」自分は其所に倒れて居る馬と自分との間に、何の因縁があるかを怪む。

焚火越しに見える倒れた馬と老人の顔とを、代る／＼比べるやうに見遣るを、老人は首一つ高い所から大きく見降して

「だつて、さうだんべえ」と莞爾する。

其「だつて、さうだんべえ」が判らないので、自分は唯だ首を拵るばかりである。

「さうでなければなんねえぢやアねえか、一同の衆はどう思ふ？」
其一同の衆も、老人に無遠慮の悪口を浴せ掛けられて癪に障つて居ると覺しく、何れも焚火にぎろりと目を光らしただけで黙り却つて居る。

「あはゝゝゝ」老人は黒い齒を露はして晒ひ出した、晝見たら此

齒は鹿の角色であらう。

「何故、此倒れた馬と僕と因縁があるんです」自分は泳へ兼ねて此方から切込んだ。

それを待つて居たと云はぬばかりに、老人は快く首肯いて

「む、そこだ、若し此馬が今迄此所に倒れて居なかつたらどうだ、一同の衆も今時こんな所にまごついちやア居なかつたんべえ、さうしたら、お前さんが雪の上に倒れて、死にさうになつたつて、自分を呼ぶやうな聲も聞えなかつただんべえし、雪の上に燃える火も見えなかつたんべえ、お前さんは眞誠に死んで仕舞つたかも知んねえだよ、そこだ、む、そこだ、そこが此馬とお前さんと因縁があるちふ所だ」と、息も急しく疊み掛けて云つて、得意然と身を反らす。

「愚圖々々して居ると夜が明けるだア、早く馬を乗つけて仕舞ふべえ」と、老人が所謂一同の衆一名有象無象の中から中ッ腹の舌打が出た。

けれども、それは

「まア待ちねえ、どうせ遅くなつただアから、此話を聞いてからにしべえ」と主張する二三人の口に打消されて仕舞つた。

老人の得意は更に一段を昇つた。

「一同の衆にやア、まことに氣の毒だが、これアはア、神様や佛様がお前様を御助けなさらうと、態と此所に馬を倒して、一同の衆に火を焚かして置いて、お前様の來るのを御待ちなされただアよ、お前様眞誠に運の強え人だ、屹度後にやア傑く出世なさるだんべえ、今夜の事をば、骨に刻んで忘れず、お前様を守護して

御座らつしやる神様や佛様に、二度と御苦勞を掛けねえようになさるがいゝだよ』と説き斷するに至つて、空に低るゝ紫なる星碧なる星は、老人の頭巾に附いた裝飾と見られた。

之を聞くと、自分は蘇々と全身の骨節に觸るゝ物あつて鳴るを覺えた、頭腦の中心から身體へ、一道の強い光を注ぎ込まれるやうに覺えた。天に口無し人を以て謂はしむとは、こんな事かと思つた、勝手の解釋かも知れぬが、自分を主として見る時は、此一場の出來事の意味は、正に老人が云ふ通りである。それに寸分違ひはない、さうでないかも知れぬなどと疑ふさへ罪惡のやうに思はれる。

嗚呼、如何なれば自分は斯く特別の天寵を享けるのであらう、こんな詰らない人間に、何故天は特別の注意を拂ふのであらう、

これでも發憤して根底から鍛へ直したら、天の特別の任命に叶ふべき働きを爲し得る人間となるであらうか、それと見て天が特別に死ぬべき自分を生かして呉れたのであらうか、無聲の聲無言の言を以て、自棄を起すな、自重しろと諭し教へるのであらうかと、有難いやうな感じがびりりと自分の全身を震はして起る。

更に一段高い所に昇つて大きく觀すれば、自分を土方の群に押し入れたのも、鑛山の穴に突落したのも、餓えさせたのも、凍えさせたのも、揚句の果には、雪の上に倒れて九分九厘迄死なしたのも、皆此大團圓へ持つて來る前幕に過ぎなくつて、天が自分を或る消息に接せしむべく、態と始めから危い道へ引張り込んだのであらうとも思はれる。

それにしても氣の毒であると、自分は全く此一場の出來事を天

爲と信じて、自分の犠牲に供せられた馬と人とを怒れと見遣つた。
「此所に辨當のあつたのも不思議ぢやアねえか」と、老人に合槌
を打ち始めたのは、前に辨當を投げ出した男である。

成程、自分の愈々確に生返つたのは辨當の爲めであつたと、更
に此辨當が自分に解釋さるべき不思議の問題となる。

「あゝ、さうだ、どうして辨當があつたんだんべい」
老人も拾ひ物をした様に氣を變へる。

「ぢやア、俺が話すべえ、俺ア今日は庭坂へ行つたアよ、嬭が
辨當を持つて行けちふから、それを腰へぶら下げて行つたどが、
庭坂の三太郎が家で馳走になつたで、辨當は其儘にして持つて歸
ると、源右衛門の馬が峠で打倒れたアから、引起しの手傳でえ
に行つて呉んるとの頼みだ、よし來たで、腰の辨當を家へ置くこ

とも忘れ、其足で直ぐ此所へ來たゝあ、何だかぶらぐして腰が
重てえと思つて氣が附くと、要らねい辨當が食附いて居るだんべ
え、だけど打棄る譯にも行かすさ、邪魔にしながら持つて居たゝ
が、こんな人助けの役に立つべえとは思はなかつた、爺様が云ふ
通り、これも矢張り此人を助けべえと思つて、神様佛様が俺の腰
へ辨當附けて置かつしやたのかも知んねえな」

全く感に堪へたやうに、何所迄も老人に合槌を打つは、別に變
つた所も無く、たゞ正直一遍の山人と見える四十男である。

「さうだ、それにちげえねえ、老人己れの事にして嬉しがる。
飯は食つたり、火には煖つたり、感情が高く波打つので身體に
は氣力が漲る、自分は此勢ひで再び歩き出さうと思つた。

「此所は何所でせう」と訊ねたのは、此所を去らうとするからで

ある。

「板谷でさア」と老人が答へる。

「ちやア福島から米澤へ行く路ですな、福島縣から山形縣へ越す峠ですな」

「さうだアよ」

「困つたな」

「何故困るでがす」

「僕は米澤へ行つちやア、路が損になります、秋田へ歸るんだから、山形へ出たいんです」

「山形へも行かれるだア、別に上の山へ出る路があるだアから」

「それアよかつた、其路へはどう行きやア出られます」

「お前様、これから行く氣けえ、老人は驚いて、一足自分の傍へ

近く寄る。

「え、山形へ行きやア知つた人がありますから、兎に角、御蔭様で助かつた元氣の無くならない中に、歩けるだけ歩いて見ませう」

「ど、どうしてお前様はそんなに氣が強えだんべえ、何だつてかんだつて、一度は死んだ人間ちやアねえか、これからまだ何里と云ふ雪の深けえ山路を、どうして、やうく生き返つたばかりの身體で、夜中過に行かれるもんでがすか」

「けれども、僕には宿屋へ泊るべき金がありません」

「金なんか要らねえよ、わしの家へ来て泊らつせえ」

此に至つて、自分は、自分を教へ且つ助けて、其教へ方助け方の常と異なる老人をば、神の權化ではあるまいかと怪しんだ、之

を崇拜し信仰する心になつた、遙の峰の上に見える小さい火の光も、此老人が、自分を助ける爲に、神通力で假に現はしたものと思はれる、彼所へ行つて泊めて貰つて、一夜を暖に眠つた上、翌る朝になつてから目を覺して見たら、或は辻堂の中であるかも知れない、けれども、家でない所を家にして自分の身を安樂にして呉れるのであるから、それがもし辻堂であるなら、愈々益々感謝しなければならぬ、兎に角、安心して此人に自分の身を任すべき場合であると、自分は改めて恭しく禮を施した。

「有難う御座います、ちやア、御言葉に甘えて、遠慮無しに御願ひ申します」

「遠慮なんか要るもんけえ、其代り、堀立小屋に毛の生えたやうな家で、圍爐裡の傍へ轉寢をするだけだアから」

「結構です、見ず知らずの者を助けて下さつて、眞誠に有難う御座います」と云つたが、お前は見ず知らずでも、此方はお前を知つて居ると呪まれはしないかと思つて、餘計な事を云つたと後悔した。

けれども老人はそれを咎めはしない。

「まア、何でもいゝだ、わしと一緒に行くべえ」。

老人が行かうと云ふので、辨當を呉れた男へ空殻を返し

「有難う御座いました、御蔭で生命を拾ひました、此御恩は決して忘れません」と禮を云ふと

「何さ、御恩も御蔭もありやアしねえだ、皆お前様の運の強えのでがすよ、俺もはア、此辨當が役に立つて、こんなな氣持のいゝ事はありましねえ」と、己れの善事を爲し得たるに満足して、そ

れ以上に求める所の無い有様、檻樓に包まれた玉とは、これの外
の物を云ふ言葉ではあるまい。

「ぢやア、わしはもう歸るべえ、一同の衆、手傳えもしねえで、
済まねえな」と、老人が野良聲高く棄臺詞して、焚火に後を向け
るに、自分も

「皆さん御邪魔をしました」と會釋して後に續く。

「畜生を酷く扱つた罰で、俺ア明日の晩迄も斯うして居るだアか
ら、お前達ア、構はねえで行くがい」と、若いのが態とらしく
強ねた事を云ふと、二足ばかり踏み出した老人が聞き附けて振り
返り

「はゝゝ、先刻わしが云つた事を忘れずに居るのけえ、氣に障つ
たら勘辨して呉んろ、兎角年寄は當り障り無しに物を云ふだアか

ら、若え者に憎まれてなんねえ」と打晒ふ。

「爺様、そんな事ア氣にしねえでもいゝだよ、馬も半分雪車へ乗
つかつただアから、俺等ももう直きに歸るべえよ」と云ふは、馬
を倒した雪車の主らしい。

焚火はやゝ衰へて、大部分は雪中の梅の花のやうに、赤い火を
白い灰が包むやうになつた、火に注いで居た目を轉じたので、雪
は濃き紫に、眞黒な馬の體軀に黄色を帯ばしめて見せる、四挺繫
ぎ合はした雪車へ、首から胴中迄乗かつて居るのが、微かに苦し
い息を聞かせる。

此所を去ると、たゞ飛びぐに足跡のあるのを路と見て、削つ
たやうな急な山を、九十九折に登り始めるのである、元氣を回復
したとは云へ、草臥れ果てゝ居るにちがひない自分には、これが